

岡山大学構内遺跡調査研究年報13

1995年度

1996年10月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡調査研究年報13

1995年度

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

ここ数年、本学キャンパスではやや規模の大きい発掘調査がつづいています。1995年度においては、前年度からの継続であった福利厚生施設北棟予定地（津島岡大第13次調査）のほか、福利厚生施設南棟予定地（同14次調査）とサテライトベンチャービジネスラボラトリー予定地（同15次調査）の発掘を行い、全体で2300平方メートルあまりの調査面積となりました。

福利厚生施設北棟・南棟予定地では、弥生時代から古墳時代にかけての水田や溝の遺構などを、サテライトベンチャービジネスラボラトリー予定地では縄文時代のドングリ貯蔵施設などをそれぞれ調査し、低湿地部分における従来の成果にあらたな知見を加えることができました。とくに後者の貯蔵穴からは、穴の底に敷いていたか、あるいはドングリを直接包んでいたと思われる編み物が良好な状態で出土しました。軟弱になった植物繊維を取り上げるのに調査員一同たいへん苦心いたしましたが、さいわい96年度予算でこの貴重な編み物を専門業者に委託して恒久的な保存処置をすることが可能となりました。緊急な対応にご理解くださった各位にあらためてお礼申し上げます。

サテライトベンチャービジネスラボラトリーの発掘地は、1986—1987年度の第3次調査ですでに一部調査を終えていました。その後建設計画に変更があり、面積を拡大して再発掘するにいたったものです。やむをえない経緯があったわけですが、こうした変更は遺跡の保護や発掘調査実施の観点からすればやはり好ましいものとはいえず、建設計画と事前の発掘調査とのかわりに課題を残した一面もあったように思われます。

本年度も発掘調査や室内作業の進行にあたっては、当センター管理委員会・運営委員会をはじめとする本学内外の関係機関、関係各位のご指導とご援助を賜りました。厚くお礼申し上げる次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長
稻 田 孝 司

例　　言

- 1 本報告は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において1995年4月1日から1996年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存、および活動成果をまとめたものである。
- 2 大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては、設定基準を次のように定めた。
 - 1) 津島地区では、国土座標第V座標系（X=-144,500m Y=-37,000m）を起点とし、真北を基軸とした構内座標を設定した。一辺50mの方形区画である。また、同地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と同南地区に二分する（図25）。
 - 2) 麗田地区では、国土座標第V座標系（X=-149,800m Y=-37,400m）を起点とし、座標軸をN15°Eに振ったものを基軸とした構内座標を設定した。地区割は一辺5mの方形を用いている（図27）。
- 3) 本文中で用いる方位は、津島地区・麗田地区は真北を、他は磁北を用いている。
- 3 岡山大学構内の遺跡の名称は、周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。津島地区構内については、全域を「津島岡大遺跡」と総称する。他地区は任意の名称で仮称する。
- 4 調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、各遺跡毎に調査順に従って次番号で呼称し、「試掘調査」「立会調査」に分類したものは、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で、試掘調査から連続して調査したものは、「試掘調査」に分類する。
- 5 「発掘調査」についての記述は現段階における概要であり、詳細は正式報告に依って頂きたい。「試掘調査」については、本年報での記述を正式報告にかえる。
- 6 表に記載した所属部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
- 7 本文・日次・挿図・写真などで使用の調査番号は表1と一致する。
- 8 本文は岩崎志保・光石鳴巳・山木悦世・横田美香が分担執筆し、執筆者名を末尾に記した。
- 9 津島地区出土種子の分析を沖陽子氏（岡山大学環境理工学部）に依頼し、その成果を附編として掲載した。
- 10 編集は稻田孝司センター長の指導のもとに、光石・岩崎が担当した。
- 11 本年報に掲載の津島地区的地形図は岡山発行の1/25000の地図を複製したものである。
- 12 調査・整理において以下の方々にご援助・教示を頂いた。記して感謝申し上げる。
山本信夫、真鍋篤行、鈴木康之、爾崎由、高安真智子（順不同）

岡山大学構内遺跡調査研究年報13 1995年度

目 次

第1章 1995年度岡山大学構内遺跡調査報告

第1節 調査の概要	1
第2節 発掘調査	1
1 津島岡大遺跡第13次調査〈福利厚生施設北棟予定地〉	1
2 津島岡大遺跡第14次調査〈福利厚生施設南棟予定地〉	6
3 津島岡大遺跡第15次調査 〈サテライトベンチャービジネスラボラトリー予定地〉	12
第3節 試掘調査	21
1 國際交流会館予定地	21
2 環境理工学部校舎予定地	22
3 ボクシング部ボックス移設地	24
第4節 立会調査	25
(1) 津島地区	25
(2) 鹿田地区	26
1 医学部アイソトープ総合センター焼却実験施設予定地	26
2 附属病院液酸タンク予定地	28
第2章 1995年度普及・研究・資料整理活動	34
1 資料整理	34
2 分析依頼	34
3 営業物	34
4 調査員の活動	34
5 日誌抄	36
6 1995年度までの遺物保管状況	37
7 遺物の保存処理	39
8 資料の貸出	41
第3章 1995年度活動のまとめ	42
附 表	43
岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項	57
1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程	57
2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程	58
3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程	59
4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程	60
1995年度埋蔵文化財調査研究センター組織	61
1 センター組織一覧	61
2 管理委員会	61
3 運営委員会	62
附 編	63

挿 図 目 次

図1	津島岡大遺跡第13次調査地点位置図	1
図2	津島岡人遺跡第13次調査土層断面図	2
図3	津島岡人遺跡第13次調査弥生～古墳時代遺構全体図	4
図4	津島岡大遺跡第14次調査地点位置図	6
図5	津島岡大遺跡第14次調査十層柱状図	7
図6	津島岡大遺跡第14次調査14・15層検出遺構平面図	8
図7	津島岡人遺跡第14次調査11～13層検出遺構平面図	9
図8	津島岡人遺跡第14次調査9・10層検出遺構平面図	10
図9	津島岡人遺跡第15次調査地点位置図	12
図10	津島岡大遺跡第15次調査十層断面図	14
図11	津島岡大遺跡第15次調査縄文時代後期・突帯文段階遺構全体図	17
図12	津島岡大遺跡第15次調査弥生時代遺構（5層）全体図	19
図13	津島岡大遺跡第15次調査弥生時代遺構（3層）全体図(2)	19
図14	国際交流会館予定地調査地点位置図	21
図15	国際交流会館予定地調査土層柱状図	21
図16	環境理工学部予定地調査地点位置図	22
図17	環境理工学部予定地調査十層断面図	23
図18	ボクシング部ボックス移設地点位置図	24
図19	ボクシング部ボックス移設地点十層断面図	25
図20	調査⑪調査地点位置図	26
図21	調査⑬上層断面と出土遺物実測図	27
図22	調査⑭調査地点位置図	28
図23	調査⑮調査地点	28
図24	調査⑯十層断面図	29
図25	津島地区全体図	31
図26	今年度の調査【1】津島地区	32
図27	今年度の調査【2】鹿田地区	33
図28	1995年度までの調査地点【1】津島地区	55
図29	1995年度までの調査地点【2】鹿田地区	56

写 真 目 次

写真 1	津島岡大遺跡第13次調査 土層断面	2
写真 2	津島岡大遺跡第13次調査 縄文時代ピット群（北から）	3
写真 3	津島岡大遺跡第13次調査 弥生～古墳時代前期遺構（西から）	4
写真 4	津島岡大遺跡第14次調査 14層上面水田畔（西から）	9
写真 5	津島岡大遺跡第14次調査 12層上面溝群（西から）	10
写真 6	津島岡大遺跡第14次調査 溝 1（西から）	10
写真 7	津島岡大遺跡第15次調査 微高地土層断面（南から）	14
写真 8	津島岡大遺跡第15次調査 谷部（10ライン）土層断面（西から）	15
写真 9	津島岡大遺跡第15次調査 縄文時代遺構全景（西半）	16
写真10	津島岡大遺跡第15次調査 サスカイト集積土坑（西から）	18
写真11	津島岡大遺跡第15次調査 アンペラ出土状況（南から）	18
写真12	津島岡大遺跡第15次調査 貯蔵穴土層断面（東から）	18
写真13	津島岡大遺跡第15次調査 3層上面溝・駐畔（南から）	19
写真14	調査⑩ 東壁土層（西から）	29
写真15	保存処理作業の経過	41
写真16	津島岡大遺跡第6次調査出土種子(1)	65
写真17	津島岡大遺跡第6次調査出土種子(2)	66

表 目 次

表1	1995年度調査一覧	30
表2	埋蔵文化財調査研究センター収藏遺物一覧	37
附表1	1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）	43
附表2	1994年度以前の構内主要調査（1983～1994年度）	44
附表2-(1)	発掘調査	44
附表2-(2)	試掘調査など	45
附表2-(3)	立会調査	47
附表3	埋蔵文化財調査室刊行物	53
附表4	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	53

第1章 1995年度岡山大学構内遺跡調査報告

第1節 調査の概要

当センターにおいては大学構内における掘削を伴う工事に際し、事務局施設部企画課を通じて事務手続きを行ったうえで、発掘調査・試掘調査・立会調査にわけて調査を実施している。

これまでのところ、その調査の対象は津島地区と鹿田地区とが中心になっている。特に鹿田地区は周知の遺跡（鹿田遺跡）として、掘削を伴う工事に際し、届出を提出した上で対応を行っている。また、津島地区においても、新たな遺跡の確認が進んでいることから、遺跡名称を「津島岡大遺跡」と総称し、届出の有無にかかわらず、少なくとも立会調査を実施している。

1995年度は、発掘調査3件、試掘調査3件（以上いずれも津島地区）、立会調査18件（津島地区10件、鹿田地区8件）を実施した。そのうち発掘調査・試掘調査については本章でその概要を述べ、立会調査の詳細については表1（p. 30～31）に記す。

第2節 発掘調査

1 津島岡大遺跡第13次調査（福利厚生施設北棟新営予定地、津島北AW～AX11～12区）

a. 調査の経過

本調査は、予算措置の関係で2カ月足らず実施して中断した1994年度の調査ⁱⁱⁱの後、半年余の中断を経て7月に再開した。再開までに半年あまりの中断が見込まれたため、調査中断時には遺構の保護等にかなりの時間と労力を費やさざるを得なかったが、再開にあたっても同様に多くの時間と労力を要した。

記録的な猛暑に悩まされ続けた調査でもあったが、弥生時代末から古墳時代にかけての多数の溝の検出をはじめとする成果を得て、10月上旬に調査を終了した。

1995年度の調査期間は7月10日から10月4日である。当初は調査員2名が担当し、8月下旬より3名に増員した。調査面積は816m²である。

b. 層序と地形



図1 津島調査地点位置図 (縮尺1/5,000)
 1. 第1次調査地点 (NP1 1982年度)
 2. 第11次調査地点 (総合情報処理センター 1993年度)
 3. 第12次調査地点 (附属図書館 1994年度)
 4. 第13次調査地点 (福利厚生施設北 今年度)

層序(図2 写真1)

現地表は標高4.4~4.6mである。1層は1907~1908年の旧陸軍屯営地建設に伴う造成土である。2層は灰黄褐色の砂質土、3層は緑灰色の粘質土で、粗砂を多量に含む。ともに近代の耕作土とみられる。4~6層はオリーブ灰色系の砂質土、あるいは粘質土で、いずれも近世に帰属すると思われる。5層上面では、南北方向の耕作痕が認められた。

7層は灰褐色の粘質土層、8層は灰色系の砂質土層である。ただし後者の堆積は部分的で確認できなかった部分も多い。9層は灰褐色粘質土層で、7~9層が中世の遺物を包含する。

10層はオリーブ灰色の粘質土層である。6、7世紀の須恵器が多く含むので、古墳時代後期の包含層と考えられる。調査区の北西部では、この層の上面で断片的な水田跡群を検出したが、帰属時期の詳細は不明である。以上の土層は、おおむね水平堆積である。

11・12層はいずれも灰褐色系の粘質土層である。両層とも色調・土質が類似するが、両層の間に砂層が認められる部分があることや、後述する溝群の多くが12層上面で検出された点などから、それぞれ11層、12層とに分けられるものと認識した。出土遺物および遺構の状況などか

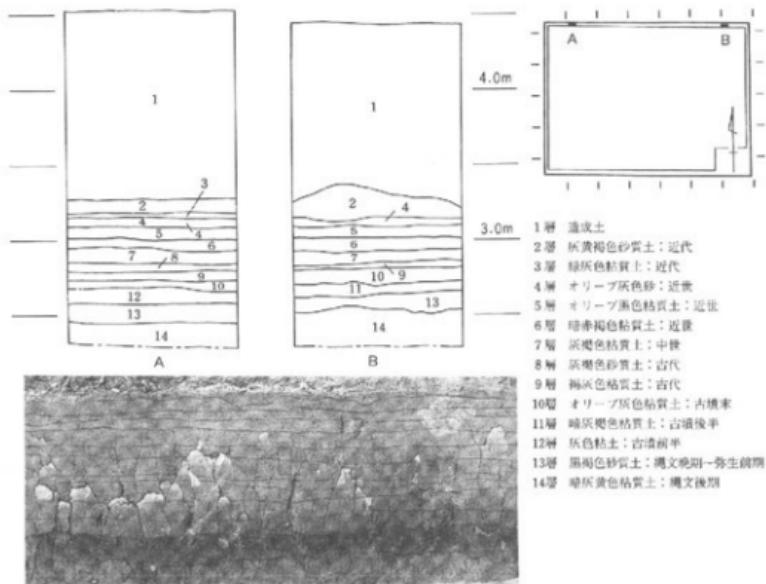


写真1 土層断面

図2 土層断面図 (縮尺1/60)

ら、11・12層は弥生時代後期～古墳時代後期の可能性が求められる。

13層は黒褐色の粘質土で、いわゆる「黒色土」である。上面の標高は2.6～2.7mである。11・12層で検出された遺構に削平されて、多くの部分で失われており、調査区の北西側でのみ確認できた。上面で水田畦畔が検出されている。また、水田面を覆う茶褐色の洪沢砂が、不明瞭ながら一部で確認されたが、調査区の断面には明瞭にあらわれなかつた。突堤文期～弥生前期の時期が考えられている。

14層は灰黄褐色の粘質土層で、基盤層と考えられる。上面で検出した遺構面では、遺物がほとんど出土しなかつたが、これまでの調査成果から縄文時代後期の時期が想定される。

地 形

本調査区は、微高地頂部からやや下がったところに位置すると考えられる。縄文時代の終わりから弥生時代の初頭にかけての黒色土の堆積が安定していることから、調査区内は本来、比較的平坦な地形であったと思われる。弥生時代中期から古墳時代後半にかけて形成された溝群が埋没する過程で、古墳時代の末頃までに11層が堆積するが、溝群が集中する調査区の南西側で、より厚い堆積を見せる。溝群の埋没過程では、調査区の南西側が幾分たわみ込んだ状況が続いたようである。しかし10層上面の段階で、すでに大きな比高差が認められないことから、古墳時代後期以降の段階で、造成等による地形の修正がなされた可能性も考えられよう。中世以降は、いずれの時期にもほぼ水平な堆積が認められる。

c. 遺構と遺物

縄文時代（14層）

調査区のはば北半部で、ピット90数基・塙集中部2カ所を検出した。ピットは径約15cm、深さ約15cmで埋土が淡褐色砂質土のものと、径30～50cm前後、深さ20～30cm前後で埋土に灰褐色粘質土をもつものの大きく2種類がある。これらの性格などについては不明である。

弥生時代～古墳時代（10～13層）（図3 写真3）

13層上面で、小区画の水田畦畔と溝2条を検出した。水田畦畔の上面は、薄く茶褐色の洪沢砂に覆われていた部分も多少あった。しかし検出中に古墳時代の須恵器が出土しており、大部分は古墳時代後期に削平をうけていたと考えられる。後述する11・12層で検出された溝群によって13層が失われているため、畦畔の検出も13層の確認できた調査区の北西部分に限られ

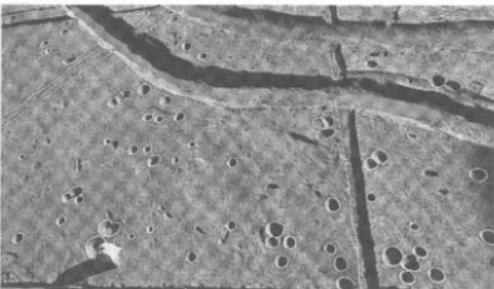


写真2 縄文時代ピット群（北から）

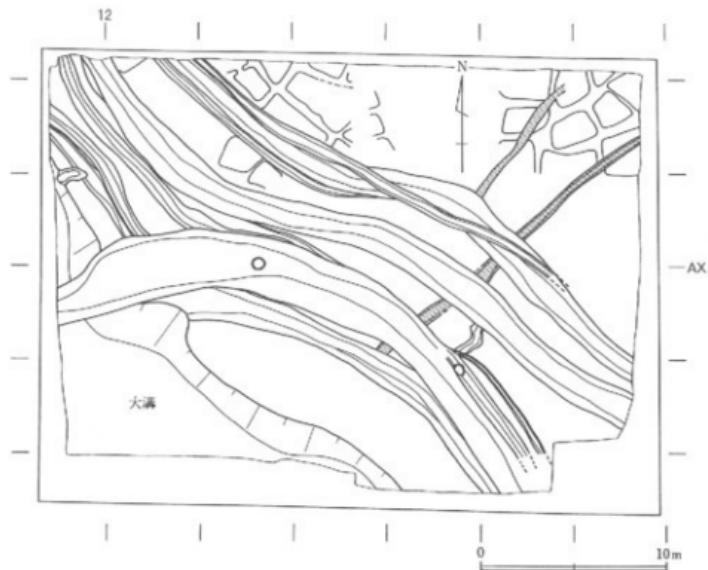


図3 弥生～古墳時代前期遺構全体図（縮尺1/300）

る。畦畔に伴う遺物はいずれも細片で、時期を特定できるような資料は皆無であるが、既往の調査成果を考慮すれば、弥生時代前期への帰属が考えられよう。

溝は北東から南南西の方向をとる。うち1条は14層上面での検出であるが、13層上面検出のものと規模や埋土、方向などが類似していることから、これと同時期のものと考えている。なお、13層上面検出の溝は水田畦畔を直接切っている箇所がある。

12層では12条の溝群と、これらよりも大規模な溝（以下では大溝と呼ぶ）を検出した。

大溝は調査区の南西部で一部が検出されただけであり、全幅を把握することはできなかった。調査区内での最大幅は約8mであるが、少なくとも10m以上の規模は復元可能であろう。最深部での深さは約1.2mである。

平面的には、調査区の南



写真3 弥生～古墳時代前期遺構（西から）

西隅付近で屈曲する形であるが、最深部はほぼ東西方向に近い向きを取る。むしろ、ここで南北方向に近い流れが合流すると考えた方が良いであろう。この北南方向の流れには取水口状のものがとりつき、付近では木杭も見つかっている。調査区の北西側に位置する第12次調査地点でも大規模な溝が検出されており¹²⁾、これにつながる可能性も考えられる。遺物としては、少量の土器片と流木が出土したのみで、概ね弥生時代後期の範囲でとらえられる。

大溝以外の溝群は、幅が1~3m、深さ30~60cmである。これらの溝はいずれも、概ね北西から南東の方向に走るものである。出土遺物は弥生時代後期のものから、古墳時代前期の土師器が多く、あるいは須恵器を含むものもある。相互に切り合う状況などからも、これら溝群はかなりの時期幅を持つものと考えられる。

10層は6世紀末から7世紀前半の遺物を主に包含するが、古墳時代前半期の遺物の包含も相当量にのぼることから、当該期の上層を削平する形で、造成されたものと考えられる。上面では、調査区北西部で水田畦畔を断片的に検出したが、残存状況が良好といえないうえ、直上まで中世遺物の包含が認められ、時期の詳細は不明である。

中世（7～9層）

9層上面では、調査区中央の南端近くで土坑1基を検出した。規模は直径1.1~1.2m、深さ約50cmである。埋土中から土器の細片数点が出土したのみで、時期の特定はできない。7層上面では、遺構は検出されていない。

近世・近代（2～7層）

近世にあたると思われる5層上面では、鐵痕と思われる南北方向の耕作痕が認められたのみである。近代にあたる2・3層で、耕作面を検出した。3層上面は東西方向の、2層上面は東西方向のそれぞれ畝列を形成するものである。調査区の東側3分の1あまりは、2層上面の耕作面の形成によって、3層上面の耕作面が削平されている。調査区の東部では3層上面から掘りこみ、拳大の礫を充填した暗渠排水が南北方向に通り、2層上面の耕作面の形成に伴い構築されたものと考えられる。

d. 調査の成果

今回の調査地点は、微高地の比較的地形の安定した部分にあたる。ここでは、弥生時代前期に、安定して堆積した黒色土上に水田が形成される。その後、弥生時代後期から古墳時代にかけて多数の溝が形成されていく状況が確認できた。

こうした状況は、本調査区に近接する第12次調査地点とも共通する部分が多い。北側の第11次調査地点などともあわせて、津島岡大遺跡の北西地区において資料の蓄積が進んだことにより、一定の成果が得られたといえよう。

（光石）

註（1）（2）『岡山大学構内遺跡調査研究年報』12 1995 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

2 津島岡大遺跡第14次調査（福利厚生施設南棟新営予定地、津島北BB12・13区）

a. 調査の経過（図4）

福利厚生施設の建築計画は1994年度に具体化したもので、附属図書館の東隣に北棟、旧共済会館の西隣に南棟の新営が予定された。このうち北棟については1990年に試掘調査を行っており、1994～1995年にかけて本調査を行った（本年報1～5頁）。南棟については当初から南北同時着工を目指しておき建設計画の決定時点で、即発掘調査に入ることとなつた。南棟新営予定地では試掘調査は行っておらず、約50m程東の地点で実施した第10次調査の成果^①を主な指標として調査にあたることとなつた。調査の開始時には第10次調査地点と同様の微高地であると予想され、弥生～古墳時代の遺構が密に分布することが期待された。

調査の開始後、造成土を除去する際に、近代の造成以降に当地点にはゴミ廃棄坑の掘削が重機によって行われていたことがわかった。このため、調査区の1/4がほぼ基盤層まで破壊された状況であった。

調査期間は1995年10月25日～1996年2月14日までである。調査面積は856m²で、調査員2名が担当した。

b. 層序と地形（図5）

層序

現地表は標高4.2～4.6m（以下高さはすべて海拔標高）である。1層は1907～1908年の旧陸軍屯營地建設に伴う造成土である。2層は青灰色砂質土、3層は淡青灰色粘質土で共に近代耕作土層である。上面は調査区の南で3.6m、北側で3.4mである。

4層は淡茶灰色砂層で、近世の洪水によると考えられる土層である。上面は3.3～3.4mである。5層は淡灰褐色砂質土層で、近世の耕作土層と考えられる。上面は3.2mである。6層はやや粘質の灰褐色土で、上面は3.15～3.2mである。7層は淡黄灰褐色粘質土層、8層は淡灰褐色粘質土層で、8層は鉄分・マンガンの沈着が著しい土層である。上面は7層が3.15～3.2m、8層が3.05～3.1mである。6～8層は中世～近世の耕作土である。9層は粘質の強い淡青灰色

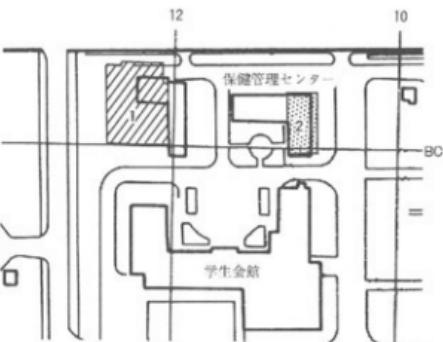


図4 調査地点位置図 (縮尺1/2,500)

1. 本調査地点
2. 第10次調査地点

土層で、中世（13世紀代）の遺物が出土している。9層上面では溝2条と東西方向の耕作痕を検出した。上面は2.95～3.05mである。10層は棕灰色粘質土で、鉄分が顕著である。出土遺物から古代の時期に推定される。上面は2.9mである。10層上面では溝5条、土坑3基を検出している。以上の土層はほぼ水平の堆積を示す。

11層は調査区の南東の隅にのみ認められる土層である。暗褐色の粘質土で下方に行くにつれ砂質が強まり、土色も淡褐色になる。この層からは弥生時代後期～古墳時代前期の土器が多く出土した。上面のレベルは3.6mと高い。近代の耕作土の直下に11層が認められ、その間の各時期の層は残っていない。また調査区南壁の観察では11層の西端はまず10層の堆積時に削平されおり、近世の削平・造成によって次々に削りとられていったことが分かる。12層は淡黄灰色砂質土層で、細砂・鉄分・マンガンを多く含む。調査区の南東に向かって砂質が更に強まり、マンガンを多く含むようになる。調査区の北西隅には堆積が認められない。上面は2.7～3.2mである。12層はその性質から洪水砂の可能性が考えられ、出土遺物から弥生時代後期～古墳時代初頭に比定される。13層は暗灰色粘質土層で、調査区の南東部・北西部には堆積が認められない。上面2.45～2.65mである。14層は暗黒褐色の粘質の強い土層で、いわゆる「黒色土」

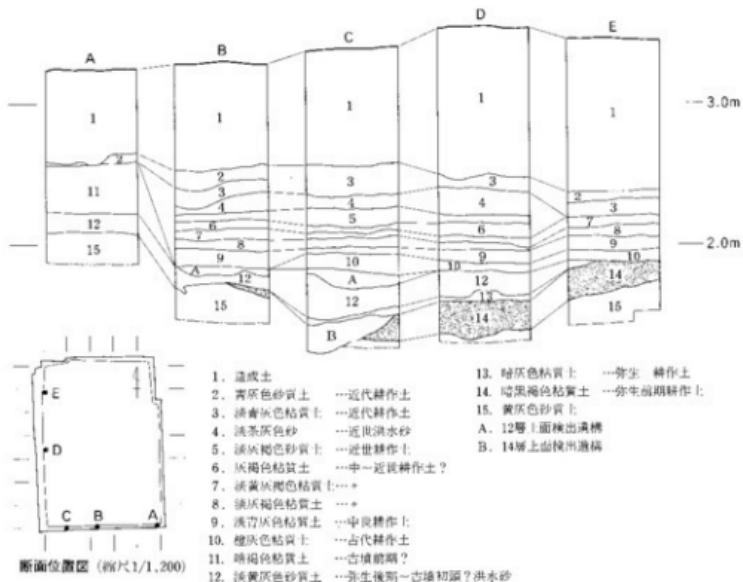


図5 土層柱状図 (縮尺1/40)

に相当する。弥生文～弥生時代前期の時期と考えられている。13層と同様、調査区の南東部・北西部には堆積が認められない。上面は2.4～2.65mである。15層は黄灰色砂質土で、基盤層と判断される。上面は2.35～3.3mで、調査区の南東部では11層の直下に、北西部では12層の直下に15層が認められる。調査区北西部では砂質が増し、一部では砂礫層が認められる。

地 形

本調査地点は第10次調査地点（保健管理センター）一帯の微高地から低地への移行部分にある。調査区の南東部には微高地の端部がわずかにかかっており、近世の造成時の削平をまぬがれた状態で残っている。一方北西部は標高2.7m程度で砂礫層が露呈する微高地となる。調査区の大半は、微高地と微高地に挟まれた浅い谷状であり、「黒色土」が堆積する。

基盤層～13層の堆積時点、すなわち弥生時代前期頃までは微高地部分と谷部の比高差は20cm前後であるが、12層の堆積後には比高差は10cm程度となっている。10層以降の堆積はほぼ水平堆積であり、古代以降水田等の耕地造成のため、各時期に造成が行われたと考えられる。この10層堆積時から11層の堆積する南東部分への削平が土層観察から明確に読み取られるようになる。しかし近代になるまで南東部分の一角は高所として残されていたようで、この一角では2層直下に11層が堆積するということになる。

c. 検出した遺構・遺物（図6～8）

縄文時代（15層）（図6）

15層上面では土坑1基を検出した。出土遺物は見られないものの、これまでの調査成果から縄文時代後期相当の可能性がある。その他には、若干焼土・炭化物が散布する部分も認められたが、遺構は検出されなかった。

弥生時代～古墳時代（11～14層）（図6・7）

14層では水田畦畔、溝2条を検



図6 14・15層検出遺構平面図（縮尺1/400）

出した（写真4）。14層は前述したようにいわゆる「黒色土」であり、調査区全面には堆積しない。水田畦畔は14層の分布するやや谷状の部分で確認したもので、残りは良好とは言えないが、地形に沿った形で形成されている。出土遺物は極めて少ないが、これまでの調査状況から弥生時代前期以降の年代が与えられる。2条の溝（溝18・19）はほぼ南北方向に併行して、14層水田畦畔を切って形成されている。地形としては最も低い部分を走る溝である。水田形成後、13層堆積前に形成されたもので、弥生時代前期～後期の間に比定されよう。13層上面では水田畦畔、土坑1基を検出した。水田畦畔は12層（洪积砂）に覆われた状態で、南北方向には非常に良好な状態で残っていた。この畦畔も地形に沿っているが、東西方向の区画は確認できず、おそらく本調査区よりも西側に広がる水田の最東の畦畔にあたるものと考えられる。出土遺物は少ないが、弥生時代後期頃と考えられる。

12層上面では溝8条と土坑3基、耕作痕を検出した（写真5）。

溝群は北東から南西に向かうものが7条、これに直交する方向で1条を検出した。このうち前者はちょうど微高地部から谷部への移行部分に形成されている。これらの溝群より東側には微高地が広がり、一方西側に向かっては一部で耕作痕かと考えられる南北方向の浅い溝2条が認

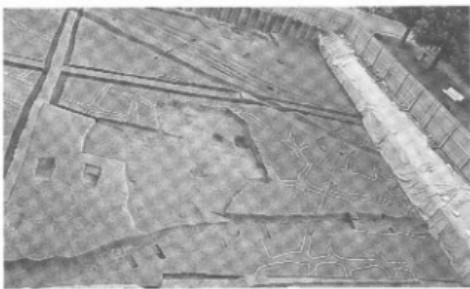


写真4 14層上面水田畦畔（西より）



図7 11～13層検出遺構平面図（縮尺1/400）

められ、耕地が広がっていたことを推測させる。溝群は切り合い関係が幾つか認められるものの近接した時期と考えられ、弥生後期～古墳初頭の時期に比定される。溝11には底部に径約30cm、深さ5～10cmのピット12基が確認された。

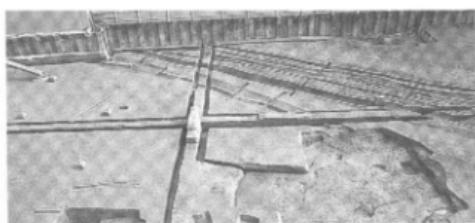


写真5 12層上面溝群 (西より)

また溝11と12の間では底面に土坑1基（土坑7）を検出した。溝11・12・土坑7・ピット列の埋土はいずれも近似している。土坑7からは土器片多数が出土し、ほとんどが壺であった。

11層で土坑1基を検出した。土坑1は調査区南端の側溝掘りさげ中に検出したもので、南壁にかかっていたため、調査区を一部拡張して調査を行った。南北0.9m、東西0.8mの梢円形を呈し、西半は中～近世層によって削平されていたが、深さは約0.45mであった。土坑1からは甕上半部とほぼ完形の高杯各1点が出土した。

古代・中世の遺構（9・10層）

(図8)

10層上面では、溝6条・土坑3基を検出した。溝は12層上面の溝と同様の方向に形成されたもの5条と、これに直交するもの1条がある。



写真6 溝1ピット列検出状況 (西より)



図8 9～10層検出遺構平面図 (縮尺1/400)

9層上面では調査区北端ではほぼ東西方向の溝2条を検出した（溝1・2）。溝1には東半部分で、径40cm、深さ15cm程度のビットを13基検出した（写真6）。

近世・近代の遺構

近世では4層で耕作痕と考えられる東西方向の浅い溝が数条認められた。

近代では2層上面で畑の畝、道状遺構、溝2条が確認された。調査区のほぼ中央を南北に区切るようになに2条の溝が東西方向につくられ、北側は南北方向の畝、南側には東西方向の畝を検出した。北側の畝面は南よりも50cm程度、段下げを行った上で形成されている。

d. 調査成果

本調査地点は、調査前に期待された微高地上にはあたらず、微高地と深い谷部との移行部分にあたる。

各時代の調査を見していくと、縄文時代では検出した遺構は土坑1基のみであり、本調査地点での当時の活動は比較的希薄であると考えられる。ただ14層中からは縄文後期の土器片が調査区北東部分に目立って出土しており、本調査区周囲に活動域が広がっていることを予想させる。弥生時代の遺構では水田跡群・溝群が目立つ。調査以前には本地点に黒色土が分布することは予測されていなかったが、今回の調査で確認され、谷状の崖地であった地点にも見事に地形に沿った形で跡群がつくられていることが判明した。残りは良好とは言えず非常に狭い範囲ではあるものの、弥生前期段階の水田域の広がりが本地点のような狭い谷地にまで認められたことは、この時期の水田經營を考える上でも有益であろう。溝群はその立地が注目され、第10次調査地点で判明した弥生～古墳時代の集落部分と、今回その一部を確認できた水田域とを区切るような地点に形成されたと言える。

古代の溝についてもそれ以前の方向を踏襲した形で形成されており、あくまでも地形にこだわってつくられている。東西方向が意識されるようになるのは、本調査区では中世の段階からであり、溝1・2がそれにあたる。

また溝のうち中世の溝1、古代の溝IIにはいずれも底面にビットが連続して検出されている。類例には第8次調査A地点^②の例があるが、その性格については今後の検討が必要である。

なお本調査の資料は現在整理途上であり、本報告内容は暫定的である。（岩崎）

註（1）『岡山大学構内遺跡調査研究年報』10 1993 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

『岡山大学構内遺跡調査研究年報』11 1994 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（2）常櫻孝志・山本悦世「A地点の調査」『津島岡大遺跡5』 1995 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

3 津島岡大遺跡第15次調査（サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営予定地、津島北AW00～01区）

a. 調査に至る経過

本調査は年度当初の計画にはなかったが、1995年度の後半になって建設工事が決定したため、急遽、発掘調査を実施することとなった。

本地点は津島構内の北東隅にあたり、1986～1987年度に発掘調査（津島岡大遺跡第3次調査）を行った位置に重複する（図9）。その際の調査区は発掘面積を最小に止めたため、中央部に未調査部分（図9-A地点）を残す不整形なものであった。今回の建設計画はその区域全体に及ぶものではなかったが、建物の敷地に限定した場合、未調査域が非常に狭い範囲でさらに不整形な形で残ることで遺跡としての価値が全く失われると判断し、全体を調査対象域とした。この調査部分、A地点の調査面積が約660m²である。

また、前回調査済みの範囲の中で、敵高地部分の多くは弥生時代前期対応層までの調査で終了していた。当時は、以下の層に関しては出土遺物が極めて僅少であることや明確な遺構埋土が確認されないことから、遺跡が広がる可能性は極めて低いと判断したからである。しかし、その後の第7・8・11～13次調査で、弥生前期層下に縄文時代後期の遺構が存在することが明らかになった。その成果から本調査区は非常に有望な地域であることが予想され、今回の調査において補足調査することとした。縄文段階の調査は図9のB地点の範囲で、面積は1600m²である。

b. 調査の経過

調査は1995年12月から造成上取りなどの準備を開始し、1996年1月16日から発掘調査に入った。終了は同年4月24日である。当初、調査員は2名であったが、2月中旬からは調査面積の拡大に対応するため1名を増員し3名が担当した。調査面積は中世～弥生時代に関してはA地点約660m²で、縄文時代の調査はB地点約1600m²である。

まず、A地点の調査から開始した。中世層までは遺構が非常に希薄であることが前回の調査で判明していたため、上面までを機械によって掘り下げた。同層以下は、中世1面・古代2面・弥生2面ないし堆積層が厚い谷地形部分では3面・弥生前期1面を精査し、それぞれで遺構を検出した。B地点の調査はA地点の調査が弥生前期層に入った2月下旬から作業員を増員して開始した。その段階で調査域は1600m²全域に拡大した。

弥生前期層の調査終了後、調査区北西部には北東か

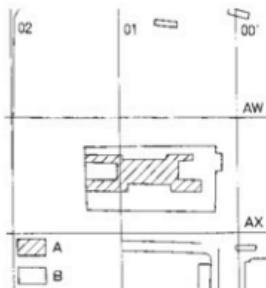


図9 調査地点 (縮尺1/2,500)

ら南西に走る谷地形が、その南側には微高地が広がる状態となった。次の掘り下げで谷部分では突堤文段階の貯蔵穴が検出され、微高地部分では縄文時代後期遺構面に達する。

谷部分では合計12基の貯蔵穴と2基のピットを調査し、さらに、下層への掘り下げによって縄文時代後期の河道とその南斜面下端に並ぶ貯蔵穴17基を検出した。この段階で調査面は湧水の激しい砂礫層に到達し調査は困難を極めた。しかし、そうした環境のお陰か、3基の貯蔵穴にはアンペラが良好な状態で遺存しており、可能な限りの記録を取り上げを試みた。上層の確認・記録、そして土壤サンプリング等を行って調査を終了した。

一方、微高地部分では、まず、河道の斜面肩部でサスカイト集積土坑が発見され、遺構の広がりに期待がもたらされた。その後、上層観察・遺物の出土状況・焼土の存在レベルから遺構面は少なくとも2面は存在することが明確となったが、平面では不明瞭なものは確実性を高めるために基盤層上面でその把握に努めた。その結果、上面では住居址状遺構1基と焼土遺構（炉）2基が、下面では焼土遺構（炉）が3基と焼土・炭が一部に集中する大型の土坑1基、ピットは全体で600数基が確認された。全ての記録を終了後、住居址状遺構に関しては、建物工事の場所からはずれていることから、シート・土壤によって埋めもどすという保存措置を講じた。

全ての調査は1996年4月24日に終了した。

c. 層序と地形

層序（図10、写真7・8）

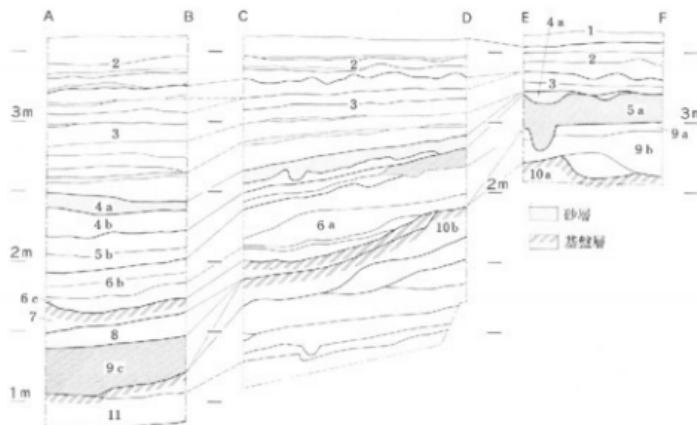
現地表は標高約5m前後（以下高さは標高）を測る。明治～近世層までは説明を省略する。

1層：淡灰色粘質土で、マンガンの沈着が顕著である。時期は中世である。

2層：古代層である。灰色系の土層で、砂の混入度あるいは粘性の違いによってa～c層に三分される。b・c層上面は砂を被る部分が多い。a層は砂質土、b層は粘質土に近いが、両者とも砂の混入が特徴で、境が不明瞭な部分も認められる。c層は粘性が強く明瞭に区別される。a層の上面は3.6m前後、c層上面は3.3～3.5mを測る。b・c層で柱群を検出した。

3層：全体的には灰褐色系の砂質土あるいは若干粘質を帯びる土で、弥生時代の土層である。微高地部分では色調・砂の混入度によって二層に細分される。谷部分では深さを増すほど細分が可能であり、層間には砂の堆積を見せる場合が多い。また、砂の混入度も高まる。上層2面で柱群を検出した。上面は3.25～3.4mに位置する。

4層：5層を覆う粗砂層である。谷部では灰色系にそして粘質を強める層も含む。a層は暗灰褐色粗砂層で5層がブロック状に混入する。谷底部に向かって灰色系に変化しつつ粘土ブロックの混入に変わる。いずれも下層を巻き上げた状況である。ほぼ全域を覆うが、微高地部の高い所では極めて薄い部分もある。b層は谷部にのみ堆積する。灰色系で粘質を強め、粗砂はブロック状に含まれる。弥生前期に近い時期を想定している。



1層 淡灰色粘土(Mn)	6 c層 暗灰色粘土(土器多)
2 a層 淡黄灰色砂質土(粗砂多, Fe 多)	7層 淡灰色粘土
2 b層 灰色(軟質)土(細~粗砂多)	8層 灰色粘土
2 c層 (暗)灰色粘土	9 a層 (茶)灰褐色土(炭・燒土粒)
3層 脱~黄灰色の土~砂質土(Fe, Mn, 粗砂)	9 b層 黒~茶灰褐色土~砂質土(炭・燒土粒)
4 a層 脱灰褐色粗砂層(黒色土多)	9 c層 基灰色砂質土(粗砂, 木質遺多)
4 b層 淡青灰色粘土(粗砂多)	10 a層 黑褐色砂質土
5 a層 黑褐色土~粘質土	10 b層 淡綠青灰色粘質土
5 b層 暗青灰色粘土(炭多)	11層 灰色砂
6 a層 黑色粘土(硬質)	12層 砂礫層
6 b層 淡黑色粘土(炭, 硬質)	

図10 土層断面 (縮尺1/40) 断面位置は図12参照

5層：弥生時代前期にあたる。微高地部に堆積するa層と谷部に堆積するb層が確認される。a層はいわゆる「黒色土」で、黒褐色系の土～粘質土である。その中の細分も可能である。上面は3.1～3.2mにある。b層は暗青灰色粘土で炭化有機物を薄層状に多く含む。a層とb層の境は漸移的で有機物の堆積は谷底部付近に集中する。a層上面で柱状を検出している。

6層：突帯文土器にあたる。a～c層に三分される。a層は斜面部に堆積する黒色粘土で硬く締まる。b層は谷部に堆積する灰黒色で炭化有機物を含む軟質の粘土である。c層は暗灰色粘土で突帯文土器の包含層として明瞭に区別される。a層からb層へは漸移的変化である。

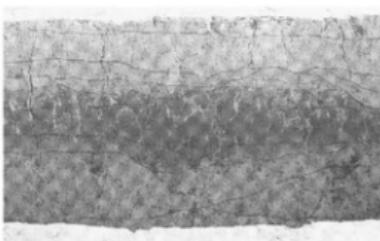


写真7 微高地上土層断面(南から)

7層：突堤文段階の基盤をなす層で谷部にのみ堆積する。淡灰色粘土層であるが、斜面部では下層の青色粘土ブロックを含む。上面で貯藏穴などを検出した。

8層：谷（河道）の底部に堆積する灰色粘土である。下層の縄文時代後期河道の上部に一致しており、同河道の上部埋土の可能性が高い。

9層：縄文時代後期に属する。a・b層は微高地部に、c層は河道に堆積する。a層は（茶）灰褐色土、b層は黄～茶灰褐色の土～砂質土である。いずれも炭・焼土粒などを含み汚れた状態を見せる。地形が高いほど黄色と砂質を強める。a層上面は2.9～3m、b層上面は2.9m前後に位置する。c層は茶灰色砂質土で粗砂・木質を大量に含む河道内埋土である。

10層：縄文時代後期の基盤層である。a層は黄褐色砂質土で微高地部に広がる。b層は淡緑青灰色粘質土層で斜面下半部で認められる。aからb層へは漸移的に変化し、一連の堆積の中で捉えられる。a層上面は2.6～2.7mに位置する。

11層：10層以下の堆積土で、灰色系の砂層である。河道底部付近では10層に対応して縄文後期の基盤層となっているが、形成時期は後期以前である。ただし、9c層と接する部分では、砂に潜り込む状態で縄文後期の土器が出土する。

12層：砂礫層で湧水層である。上面は河道底部で0.8mを測る。

地 形

本地点では自然環境に起因する縄文時代後期から弥生時代にかけての変化と、人為的な土地改変に起因する古代に地形の変化が認められる。以下、時代を追って変遷を説明しよう。

〈縄文時代後期以前〉

多量の流木や植物遺体と砂の堆積が連続する状況が展開する。下面是標高0.8m付近の湧水層まで確認できる。こうした中で、ある時期に微高地の芯が形成される。それが縄文後期の基盤層（10層）の堆積である。厚さ1m強におよぶ比較的均質な堆積が短期間に進んだと判断される。直上には後期の土器片が張り付く。つまり、後期以前は水量の豊富な河道が広い範囲に広がり、後期段階に入ってから本地点の微高地形成が進んだようである。

〈縄文時代後期～弥生時代前期〉

微高地形成後、本地点には北東～南西方向の河道が走り、南側に微高地が広がる。縄文時代後期には、河道と微高地との比高差は1.5mを測る。堆積土も相変わらず多量の大形流木や植物遺体、砂礫・砂等が巻き込まれた状況を呈し、水量の多さを推し量ることができ



写真8 谷部(10ライン)土層断面(西から)

る。流木の直下にかろうじて貯蔵穴が遺存する状態などから、洪水による岸辺の破壊もあったようで、斜面は水流に抉られたように急峻な状態を呈する。一方微高地部は東方向に緩やかに高くなっている。

弥生時代初頭前後には、後期の堆積作用で埋没が進んだ河道は微高地との比高差を1mまで縮め、緩斜面が形成される。水量は極端に減少し、堆積土は粘土あるいは粘質土に変化する。黒色有機物層や灰色粘土層等が薄く互層に認められ低湿地の状態であったことを窺わせる。谷状地形である。

〈弥生時代〉

微高地部での堆積は少ないが、谷部では前期には粘土が中心であった堆積が、再び砂質土あるいは砂に変化し、比高差は急速に縮まっていく。その差が20cm前後になった段階で、水田畦畔が認められる。確実な時期は不明瞭であるが、後期前後が考えられる。

〈古代以降〉

古代には弥生層に至る造成が行われる。この段階で谷地形は解消される。

d. 遺構・遺物

本調査成果の中心は縄文時代後期から弥生時代の遺構である。縄文時代では貯蔵穴群、住居址状遺構・炉・サヌカイト集積土坑など注目点が多い。弥生時代では水田畦畔と溝群である。その他には古代・中世の水田関連遺構がある。

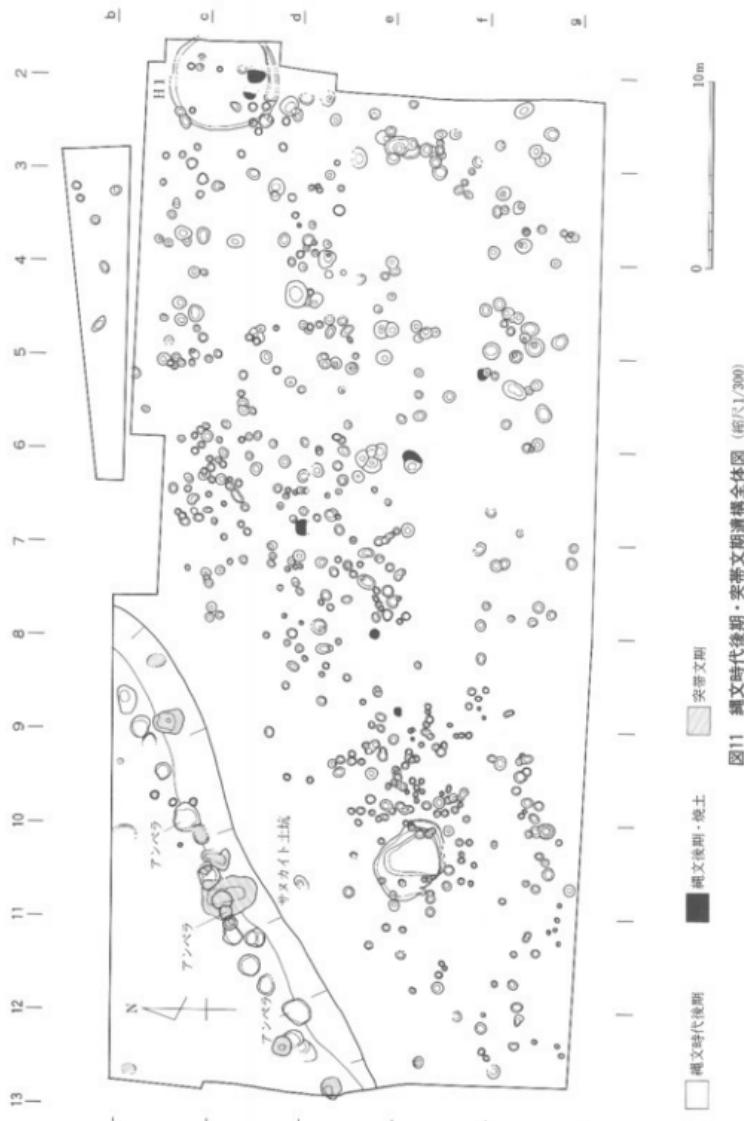
縄文時代後期（図11・写真9～11）

微高地部では住居址状遺構（H1）1基・焼土集中部（炉含む）7箇所・土坑1基・サヌカイト集積土坑1基・多數のピット、河道部では貯蔵穴17基が検出された。いずれも後期に属す。

H1は調査区の東北部で9a層上面に検出された。径は5～6mの円形を呈す。床面はあまり明瞭ではないが、中央からやや南寄りの位置で炉と考えられる焼土、そして柱穴が3カ所に検出された。住居址と断定するには、床面や柱穴が明瞭とは言い難い点、遺物の出土状況が際立っていない点などいくつか問題は未解決ではあるが、形状から住居址の可能性を考えたい。焼土集中箇所（炉を含む）と土坑は被熱遺構としてあげられる。前者は上層で2箇所、下層で5箇所が確認された。後者は基盤層上面で検出されたが、径4m前後の不整規円形を呈す。下面あるいは壁面に被熱痕が残る。今後検討を要す



写真9 縄文時代遺構全景（西半）



るものである。サヌカイト集積土坑は微高地肩部に位置する。径70cm程度の土坑に盤状剝片5個が置かれる（写真10）。ピットは約600数個が確認されたが、一部には壁面が焼けた状態のものも認められる。

河道部では貯蔵穴17基が南斜面の下端にはほぼ一列に並ぶ。規模は径0.8~1.5mの円形あるいは不整円形を呈し、深さは0.2~0.5mであるが、上部の破壊を考慮すると本来はより深いはずである。量の差はあれ大半のものが内部に堅果類を残す。種類はトチ・カシ類が目につく。3基の貯蔵穴からにはアンペラが遺存しており、いずれも底部に敷いて堅果類を包んだような状況が確認された（写真11）。また、河道底部からは後期前半の土器が多数出土した。

突堤段階（図11、写真12）

谷部において、貯蔵穴12基とピットが2基検出された。大半は南斜面下端に並ぶが、1基は北斜面下端にあたる。前回の調査成果と合わせると両岸に並ぶ状態が復元できる。形状は様々で、径は0.7~3m、深さも0.2~0.8mとかなりの幅がある。堅果類が確実に確認されたのは3基程度で量も少ない。また谷の中央には方向に直交する杭列3列が認められた。縄文時代後期の砂礫層にまで打ち込んでいる。時期は弥生時代前期から縄文時代までの幅が想定できるが、現状では当時期の可能性を考えている。

弥生時代（図12・13、写真13）

下層（5層）では北東から南西に長軸を有する小区画水田を検出した。畦畔は比較的明瞭に検出できた部分が多い。時期は前期に対応すると考えられる。上層（3層）では溝5条と畦畔を検出した。畦畔は下層と同様の方向である。溝群は水田畦畔を切っており、時期が新しいことは確実であるが、共通した方向性などから両者間の時期的な隔たりは小さいと考えられる。溝は重複している上、上部削平の影響で規模は不明確であるが、幅約40cm、深さ約20cm前後が確認される。1条を除いて、その底面は5a層（黒色土）上面をかすめる程度でおさまる。



写真10 サヌカイト集積土坑（西から）



写真11 アンペラ出土状況（南から）

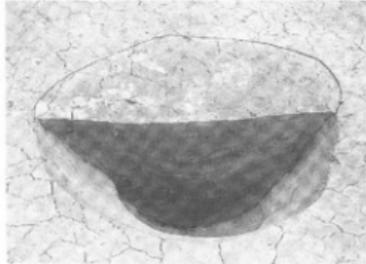
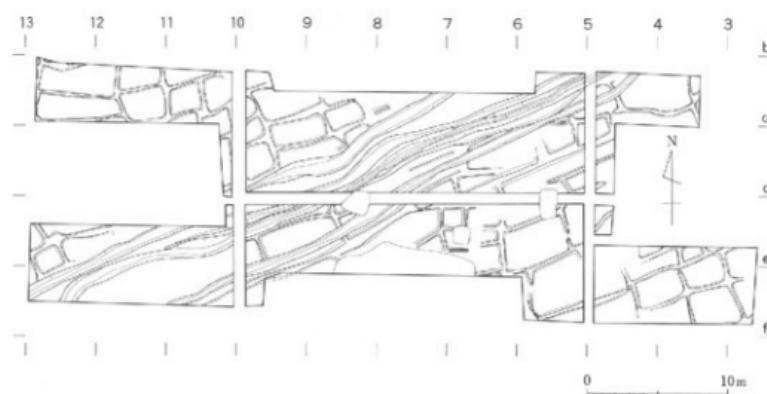
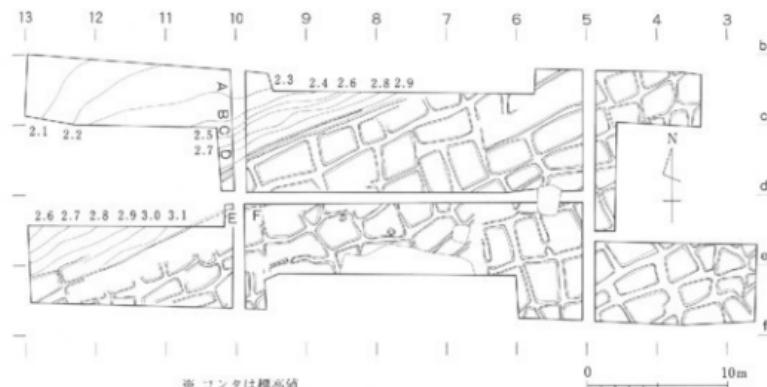


写真12 貯蔵穴土層断面（東から）



古代・中世

中世上面でも前回の調査と同様に南北方向の小規模な溝・鋤痕が確認された。中世廃除後、古代の遺構面は一部で砂を被る状態で2面が認められ、水田畦畔の検出に期待がかかったが、明確なものとしては東西方向の1条があげられる程度で、前回のような整然と



写真13 3層上面溝・畦畔（南から）

した区画を見つけることはできなかった。ただ、この東西方向の畦畔は非常にしっかりしたものであり、両遺構面ではぼ踏襲されている。

e.まとめ

今回の調査は、1986年度調査の第3次調査地点を覆う形で行った。そのため、新たなデータの蓄積に加え、前回に疑問点として残っていた問題のうちいくつかは答を得ることができるなど、非常に成果の多い調査であった。いくつか注目される点をあげよう。

まず、繩文時代後期の状況である。地形の問題では微高地と河道との関係を様々な点で良好に捉えることができ、微高地の形成時期や遺跡の進出時期などの解明に有効な資料を得ることができた。遺跡の方では、微高地部で繩文時代の包含層と言える土層の存在・遺物量の豊富さ・明瞭な柱穴群の存在などが確認され、從来希薄であった生活痕跡を幅広く捉えることができた。その中で、特に住居址状遺構の存在は、本地点の北東部に位置する朝寝鼻貝塚の存在を考え合わせると、居住区の末端が本地点に達する可能性を示唆する。そして、サヌカイト集積土坑の存在、さらに、河道部分には貯蔵穴群が並んで構築される状況は、当時の土地利用形態を考える上で重要な資料であろう。貯蔵穴に関わる各種のデータも特筆される。突堤文段階の貯蔵穴のデータと合わせて、環境復元や貯蔵穴の利用方法さらに当時の食料確保の実態を探る上で貴重である。

もう一点は、前回にも多大な成果をあげた水田利用形態の問題である。畦畔に関しては前回の成果をより強化する結果を得ることができた。またそれ以外に不明確であった用水路関係で、微高地土に多數の溝の存在を確認できた点は新たな資料として重要である。

最後に、古代の水田に関しては、前回の調査成果に疑問を投げかける結果となった点も指摘する必要があろう。

ただし、本調査の資料は現在整理途上にあり、本報告内容は暫定的なものである。（山本）

参考文献

『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊 1992 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第3節 試掘調査

本年度は津島地区において3件の試掘調査を実施した。津島南区で、国際交流会館新館予定地、及びボクシング部ボックス移設地の調査、津島北区では環境理工学部棟新館予定地の調査を行った。以下に概要を記す。

1 國際交流会館予定地（津島南BE26区）

調査経過

1995年8月、国際交流会館の建設計画に伴い、事務局と調査方法について協議を行った。建設予定地については詳しい状況は不明であり、1988年に北側の留学生会館建設の際に試掘調査が実施されているのみであった¹⁾。この試掘結果からは、今回の地点も遺構・遺物とも分布の希薄な地域にあると予測された。しかし建設予定面積が広いこともあり、予定敷地内の旧地形・土層堆積状況の確認を目的とした試掘調査の必要があるものと判断した。調査は予定敷地内に2ヵ所の試掘坑を設定し、重機によって掘削を行ったのち、断面観察を行うこととした。調査は1995年9月4～6日に実施し、調査員1名が担当した。

調査の概要

予定敷地内の2ヵ所に試掘坑を設定した。いずれも2×2mの規模で西側をA地点、東側をB地点とした。

現地表は標高3.6～3.7mである。1層は造成土で、厚さ1.5～1.6m。旧陸軍屯営地建設に伴う造成土を含む。2層は青灰色粘土層、旧陸軍による造成以前の水田耕作層である。東西方向に畝痕が認められる。3・4層は黄灰～灰色粘質土層で近世相当、5・6層は灰褐色～淡茶褐色粘質土層で中世相当かと考えられるが、いずれの層からも遺物は一切出土していない。7層は青灰色粘土層で、基盤層と考えられる。またTPAで重機の届く範囲まで深掘を行ったところ

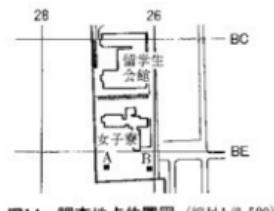


図14 調査地点位置図 (縮尺1/2,500)

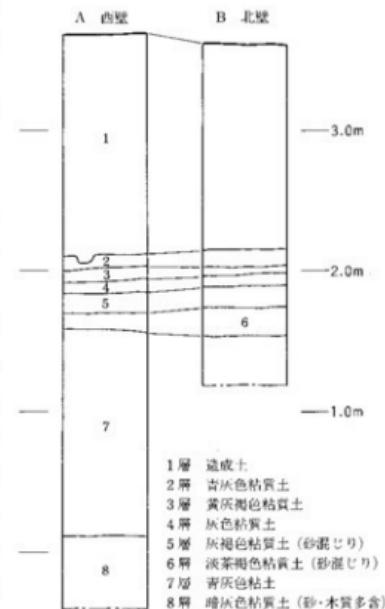


図15 土層柱状図 (縮尺1/40)

ろ、海拔標高 0 m付近からは木質を多含する暗灰色粘土の堆積が認められ、旧河道の存在が予測された。いずれの土層もほぼ水平に堆積している。

遺構は 2 層上面の水田以外は確認されなかった。

まとめ

今回の調査地点からは出土遺物ではなく、各土層の時期決定は留学生会館の試掘結果からの推測に過ぎない。調査地点は旧地形の低い場所にあたり、中世以前までは低湿地状を呈していたものと考えられる。その後も近代の水田以外の遺構・遺物が認められなかつたことから、予定敷地内の埋蔵文化財の分布は極めて希薄であると考えられる。
(岩崎)

註（1）藤原千鶴 1989 「国際交流会館予定地」『岡山大学構内遺跡調査研究年報 6』 p. 29 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

2 環境理工学部校舎新設予定地（津島北、AW02・03区）

調査に至る経過

調査地点は現在、馬術場として利用されている。1995年度に環境理工学部が新設され、当調査地区が新学部の校舎建設予定地とされたものである。

東側が津島岡大遺跡第 3 次調査地点であり、西側が第 6 次、第 9 次の各調査地点にあたることから、この調査区で各期の遺構・遺物が良好な状態で検出されることはほぼ確実視された。

とりわけ、調査区北部には古代の大溝が東西に向に位置することは間違いない、さらに南部では 3 次調査地点で検出された繩文期の河道がかかる可能性も懸念された。こうした周囲の状況から、調査対象地域内の北部については、既往の調査成果から掘削深度等が充分に予測可能なため、試掘は不要と判断された。南部については不確定要素が多く、土層の堆積状況等の把握が必要として、今回の試掘調査の実施に至った。

調査は、馬術場の東西 2 蘭所に、各々 2 m四方の試掘坑を設けて行った。西側を試掘坑 1 (TP 1)、東側を試掘坑 2 (TP 2) と呼称する。調査は 1995 年 11 月 21・22 の両日に実施し、調査員 1 名がこれを担当した。

調査の概要

2 蘭所の試掘坑の土層は基本的に共通しているため、ここでは特に断らない限り一括して記述することにする。

現地表の標高は約 5 m で、地表より約 1.2 m が近世以降の造成土である。暗青灰色の 2 層は

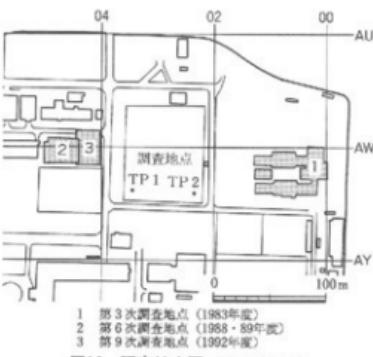


図16 調査地点図 (縮尺1/2,500)

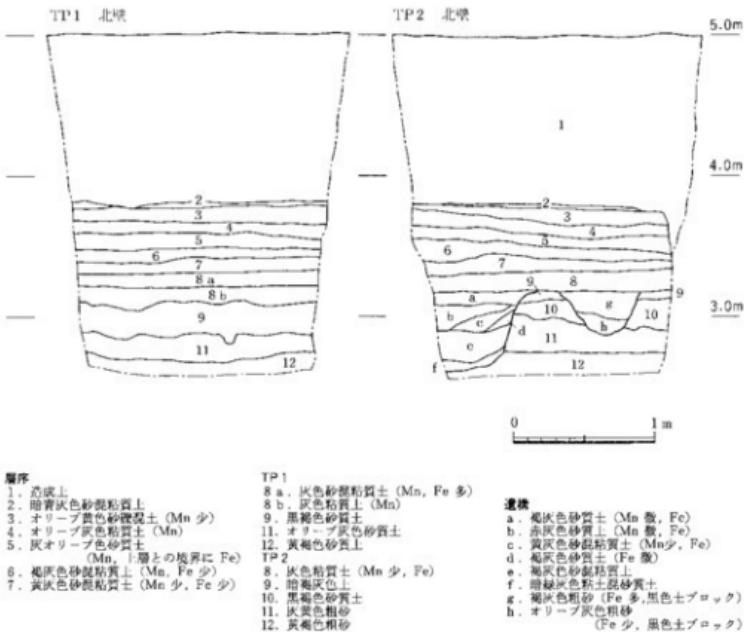


図17 土層断面図 (縮尺1/40)

明治期の耕作土、以下オリーブ黄～灰色の3・4層は近世に比定できるであろう。4・5層間には鉄分の沈着が認められ、層界が比較的明瞭である。TP2では5層から中世の上器片が採取されている。6・7層はともに粘質で区分が不明瞭である。8層は上層よりさらに粘質を強め、TP2で古代の土器片を含むことを確認している。TP1では上下に分層可能であったが、TP2においては識別できなかった。

いわゆる黒色土(9層)上面の標高はおよそ3.2mで、層厚20cmあまりである。TP1では安定した堆積を見せるが、TP2では幾分不安定である。TP2ではこの上面から切り込む遺構を確認している。対面する断面の観察所見も併せて考えると、南北方向にのびる溝の可能性もある。

10・11層はいずれも灰色系の砂質土もしくは粗砂である。10層は上層の影響を二次的に受けた漸移的な部分であろう。ともに基盤と考えられる。

まとめ

今回の調査は、上述のように断面観察による土層堆積状況の把握に主眼をおいた調査であ

り、検出した遺構の性格等を考えるに足る材料は得られていない。しかし、基本的に安定した層序が把握され、きわめて少量ではあるが遺物の出土もあったことで、一定の成果が得られた。

古地形については、黒色土上面の標高が3.2m前後と、比較的高いことが注目される。すなわち、隣接する3次調査地点では3.0~3.1m、6次調査地点では2.7m程度となる。これまでの構内遺跡の調査成果から考えると、微高地頂部近くでは黒色土が削平されている場合が多く、黒色土が認められるのは微高地から低地部に移行する部分にあたる場合が多いようである。また、今回の試掘坑では、黒色土の直上が古代の遺物の包含層であり、弥生・古墳時代に相当する土層が失われている可能性が高い。以上のようなことから考えると、この調査地点の南部に限っては、多くが微高地部分にあたると考えて良いであろう。

調査前には縄文期の河道が調査区を横切る可能性も考えられたが、少なくとも今回調査を実施した馬術場の部分については、その可能性は低くなった。

(光石)

3 ボクシング部ボックス移設地（津島南地区、BF07区）

調査の経過

環境理工学部の建設設計画に伴い、ボクシング部の部室が撤去・移設されることになった。部室の設置に伴って掘削される深さは、現地表から40cmで造成土内でおさまるので、通常は立会調査で対応する。しかし掘削面積が広いため、事務局と協議を行った。移設予定地点周辺では、1994年度に陸上競技場の照明塔を設置する際に立会調査が行われたのみである^⑩。その際に、中世から古墳時代にかけて何らかの遺構が存在することが予測された。また掘削面積が広いことや、この地区が調査の対象となったことが少なく遺跡の状況についても不明な点が多いこともあり、予定敷地内の旧地形・上層堆積状況の確認を目的とした試掘調査が必要であると判断した。

調査は予定敷地内に約2×1m、深さ3mの試掘坑を設定し、機械掘削を行なったのち、その断面を精査し記録するという方法を取った。調査は1996年3月18日に実施し、調査員1名が担当した。

調査の概要

現地表は、標高4.8m前後である。1層は造成土で、厚さは1.2m前後である。2層は青灰色砂質土で、近代の耕作土である。3~5層は淡黄褐色の砂質土で近世の時期に、6層は淡灰褐色の粘質土で中世の時期に相当すると考えられる。7層は灰褐色粘土層で、津島地区で古代層とされるものに似る。8層は灰褐色砂質土層、9~11層は淡灰褐色の砂質土層で古墳時代~弥

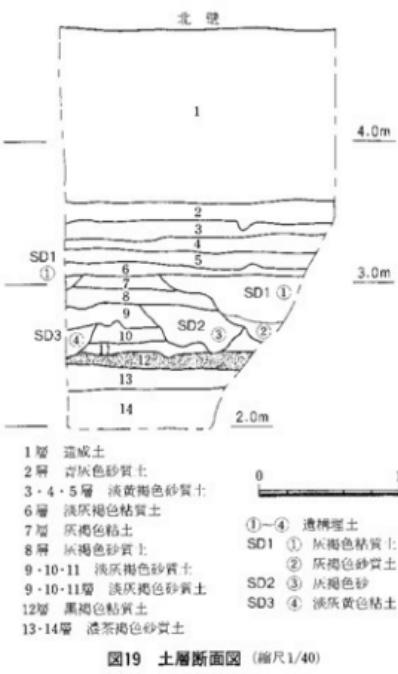


図19 土層断面図 (縮尺1/40)

生時代後期の層と考えられる。12層は黒褐色の粘質土で、「黒色土」と呼ばれている縄文時代晩期～弥生時代前期の層である。

13, 14層は濃茶褐色の砂質土層であるが、13層と14層の境界はあまり明瞭でなく漸移的であり、次第に色調が薄くなり、砂質が強くなっていく。掘削は黒色土を確認した時点で止めたため、基盤層まで達しておらず、14層の途中で終了した。

遺構としては、古代のものと思われる溝1条(SD1)と、古墳～弥生時代にかけての層で溝2条(SD2・3)が断面で確認できた。遺物は土器の細片のみで、時期を決定できるようなものはなかった。

まとめ

津島南地区の東側は、これまで調査の対象となったことが少なく、遺跡の状況にも不明な点が多くかった。しかし、1994年度に行なった照明塔設置の際の立会調査や今回の

試掘調査で、旧地形復元の有効なデータを得ることができた。陸上競技場周辺では、縄文晩期から弥生前期の層である黒色土が広がることが分かった。この黒色土層上面では、今回の調査では確認できなかったが、これまでの津島地区での調査成果から当該層の水田耕作の存在が考えられる。また弥生時代後期から古墳時代、古代を中心として遺構が確認されている。こうしたことから陸上競技場周辺では埋蔵文化財の分布密度が高いことが分かった。（横田）

註(1)『岡山大学構内遺跡調査研究年報』12 1995, 13~14頁 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第4節 立会調査

(1) 津島地区 (図25・26 表1)

1995年度における津島地区的立会調査は事業別にみると7件、計10箇所を行なった。これらは掘削深度が浅く、造成土内で終了するものが大半である。掘削が深い所まで及んだ調査としては調査⑨・⑫・⑬がある。

調査⑨は調査②（福利厚生施設南棟予定地）の調査区内にあたるため、詳しくは前述の第14

次調査概要に掲げたい。調査区南東側にあたる部分で、微高地の頂部にあたっており明治層以下基盤砂層まで計5枚の層を確認した。出土遺物は見られず、調査②の南東端や保健管理センターの調査（津島岡大第10次調査）で認められた弥生～古墳時代の包含層はこの地点にまでは広がっていないことが確認できた。調査⑩・⑪はいずれも電柱掘削機を用いた調査であり、調査⑫では径70cmで7箇所、調査24では径1mで5箇所の掘削を行った。掘削深度は1.4～1.5mで、深い箇所で近世層、大半は明治層までの掘削にとどまった。

今年度の津島地区における立会調査では件数は少なかったものの、造成土厚の確認等、地形復元に有効な情報が得られた。

(2) 鹿田地区（図27 表1）

鹿田地区では、事業別にみると2件、計8箇所の立会調査を行った。人半は鹿田地区基幹整備事業に伴う工事立会である。その中で調査⑬⑭はいずれも、通常の基礎工事と異なり、地中深く杭を打ち込むという工法であり、遺構面への破壊が及ぶ面積はごくわずかであった。しかし、調査⑮（アイソトープ総合センター焼却実験施設）地点については鹿田遺跡第6次調査地点の隣接地で、遺構・遺物の検出の可能性が極めて高いと予想され、また調査⑯（附属病院液酸タンク予定地）については、周辺での調査事例がこれまでになく、土層等の状況の把握の必要があった。このため土層断面の観察と記録に重点をおいた調査を行うこととし、以下に報告するよう重要な知見が得られた。

また同じくアイソトープ総合センター焼却実験施設関連工事では調査⑰・⑱、またグラウンド防球ネット取設工事では調査⑲・⑳において、それぞれ、上層の堆積状況の確認等を、狭い範囲ながら行うことができた。今年度の立会調査では昨年に引き続き鹿田キャンパスの南側において有効なデータの蓄積を得たと言える。

(岩崎)

1 アイソトープ総合センター焼却実験施設新設に伴う立会調査（調査⑮：鹿田CB71区）

調査の概要

調査区は第6次調査地点⁽¹⁾に隣接するため、概ね前回の調査成果を援用して行ない、中世と弥生期の遺構の状況を確認することに主眼を置いた形となった。調査面積は上端で東西約1.5m、南北2mあまりであるが、トレーニングの基底では東西約1m、南北1.5m程の極めて限られた範囲となっている。掘り下げは現地表下2mあまりに及ぶ。

現地表下80～90cmは造成土である。調査区の東半では前回調査時の埋め戻し土が認められることから、文字どおり既往の調査区に接した位置であることがわかる。以下、近

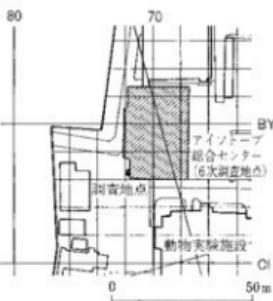


図20 調査地点位置図 (縮尺1/2,000)

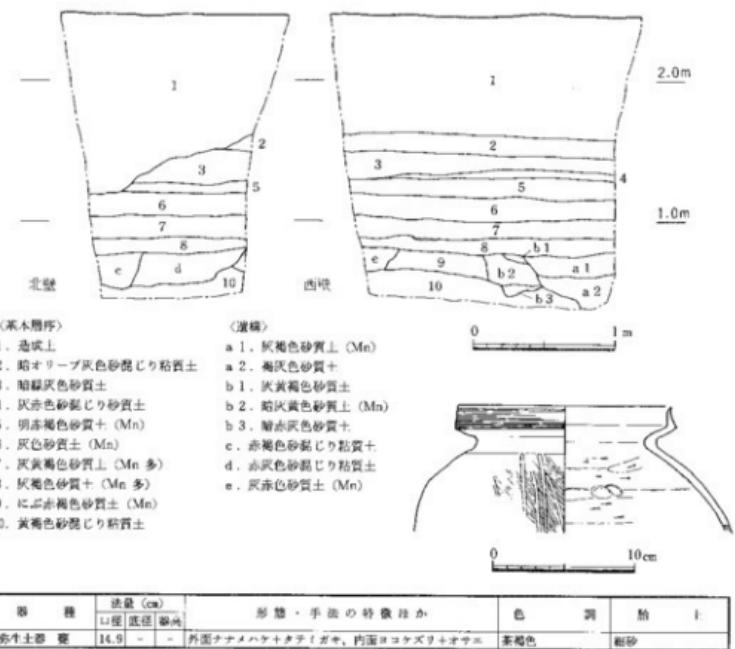


図21 土層断面及び出土遺物

相当と思われる灰色系の十層（2・3層）が認められる。優ね灰褐色系の4～6層が中世相当と思われる。近世・中世については、当該期の遺物は認められず、遺構も調査区内では検出できなかった。

マンガンを顕著に含む灰褐～灰黄褐色の7・8層が、弥生時代から古墳時代初頭にかけての土層に相当すると思われる。これらの十層中からは土器片の出土があり、とくに、8層上面では古墳時代初頭の壺形土器の口縁部がまとまって出土している。7・8層ともに上面での遺構検出を試みたが、明瞭な遺構は認められず、土層断面の観察によつても同様である。

9・10層は無遺物層である。断面観察の所見によれば、9層上面から切り込まれるラインがいくつか認められている。ただし9層については、10層の二次堆積土の可能性も加味して基本層序に加えているが、あるいはこれ自体が遺構の埋土の可能性もある。また、いくつか認められる遺構状のラインのうち、調査区西壁の北半で認められるものは（図21）、これが直線的に東壁に向かう状況が平面でも確認できている。溝、上坑などの可能性も高いであろう。ただし、6次調査の成果を参照するかぎり、これに相当する遺構は検出されていない。これらの遺構の

時期を直接示す遺物の出土は見ておらず、古墳時代初頭以前というより他にない。

まとめ

今回の調査では、調査面積が狭小なことから明確にし難い部分も多い。上述のように、調査当初から6次調査の成果を念頭に置き、中世期と弥生期の遺構確認に主眼をおいていたが、中世については遺構・遺物ともに確認できなかった。双方の調査区の位置関係と、6次調査の際に確認している遺構の位置関係を照合の上検討すると、今回の調査区は、ちょうど2本の溝の間にあたる位置を占める可能性が高い。偶然に調査区の東西幅が特に狭かったこともあります、こうした理解でまず問題ないと思われる。

下層で認められた、弥生時代から古墳時代にかけてと思われる遺構についても、土層断面で観察できただけである。しかもきわめて限られた範囲の所見によるため、既往の調査との対応も困難である。遺構として認識できるかどうかについても疑問が残るものがないわけではないが、6次調査の成果と関連させていま少し検討を要するかもしれない。

(光石)

註(1)『岡山大学構内遺跡調査研究年報』8 1991 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

『岡山大学構内遺跡調査研究年報』9 1992 同上

2 附属病院液酸タンク設置に伴う調査（調査⑨：鹿田CD07・08区）

調査の概要

調査地点は鹿田地区の東側出入口とすぐ北側のゴミ焼却場との間にあるタンク基礎の北に接する位置にあたる（図22）。構内の東端部である。

調査は1995年11月15日に実施し、調査員1名が担当した。

調査地点に上端で1.7×2.5mの試掘坑を1箇所設定し（図23）、現地表から2.3mまでの調査を行った。現地表は標高約2.3mである。1層は造成土で、厚さ0.9～1.0mを測る。2層・3層



図22 調査位置図 (縮尺1/1,000)

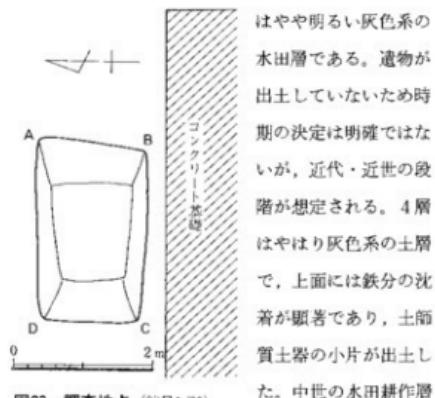


図23 調査地点 (縮尺1/80)

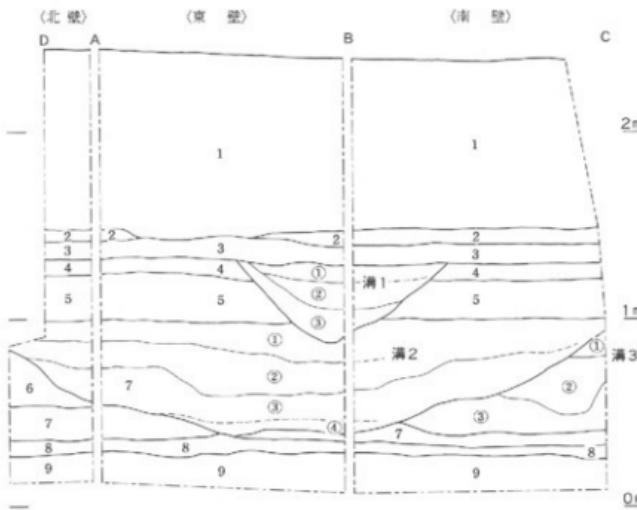


図24 土層断面（縮尺1/30）

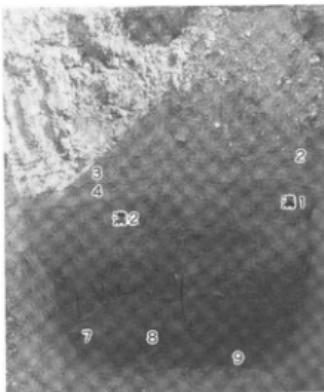


写真14 東壁土層（西から）

と見られる。5層も4層に類似する土層であるが、鐵～細砂の混入および鉄分の沈着が特徴である。そのため、色調はやや黄色かった状態を示す。6層は青灰色系の砂質土で非常に硬くしまっており、上層とは明瞭に区別される。遺構との関係から中世の基盤層となっていたことが考えられる。7層は砂を含む粘質土～粘土層である。8層は軟質の粘土層、9層はさらに軟

質を強める粘土層である。7層以下は無遺物層と推定される。

遺構は、4層上面と6層上面で確認される。いずれも溝を形成する可能性が高い。平面規模あるいは方向については不明であるが、溝1は深さ50cm、溝2は深さ60cmが確認された。溝2からは中世段階の土師質土器の小片が出土している。溝3は僅かに断面に認められるのみで詳細は不明である。また、埋土が硬くしまっていることから、基盤層に含まれる可能性も残る。まとめ

今回の調査地点では近代・近世の水田層の下に、中世の包含層および基盤層が確認された。遺構面は2面は確実に存在しており、溝もしっかりしたものであり、本地点には中世段階での集落の広がりが予想される。中世以前については、低湿地的な状況を見せており、遺跡の広がりは確認できない。非常に希薄と言えよう。

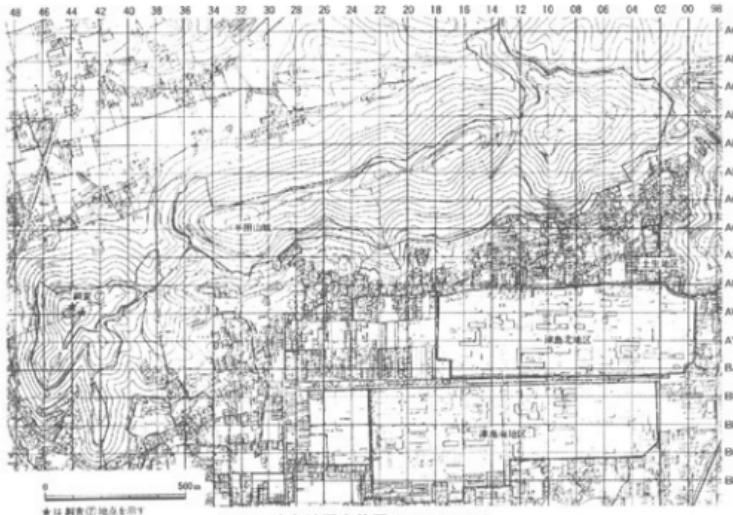
(山本)

註(1)『岡山大学構内遺跡調査研究年報』4 1987 19頁 岡山大学埋蔵文化財調査室

表1 1995年度調査一覧

番号	種類	調査地区	所属	調査名称	調査期間	探削深度(m)	備考
1	発掘	津島北 AW~AX11・12	事	福利厚生施設北棟新宮	7.10~10.4	2.1	調査面積816m ² 。弥生時代の水田、弥生~古墳時代の溝、 縄文時代後期のビーム群 (津島岡大第13次調査)
2	発掘	津島南 BB12・13	事	福利厚生施設南棟新宮	10.25~2.14	2.2	調査面積896m ² 。弥生時代の水田、弥生~古墳時代の溝、 土坑 (津島岡大第14次調査)
3	発掘	津島北 AW00・01	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリ新宮	1.16~4.25	2.8	調査面積660m ² 。(縄文時代につ いては1800年)。弥生時代の水 田、房、縄文時代後期竹軸穴、 後期町家穴、聖火穴、炉、 ビット、土坑(津島岡大第15 次調査)
4	試掘	津島南 BE25	事	国際交流会館新宮	9.4~7	2.2	造成上以下、明治・近世・中 世と思われる上層確認。以下 は湿地状、出土遺物なし。遺 構は明治の塩のみ。
5	試掘	津島北 AW02・03	事	環境理工学部棟新宮	11.21, 22	2.5	標高3.2mで黒色土上面。
6	試掘	津島南 BP07	学	ボタシング部ボックス移設	3.18	3.0	標高2.5mで黒色土確認。弥 生~古墳時代の溝2条、古代 墓1条確認。
7	立会	津島北 AW04	事	地域学習センター便所増築	7.10・17	0.55	造成上内
8	立会	津島北 AZ03	教育	木道配管修理	7.12	0.7	既改工事内。
9	立会	津島南 BB12	事	南福利厚生施 設予定地	樹木移植	9.4	1.5
10	立会	津島南 BB12	事	支障部分撤去	9.6	0.3	造成上内
11	立会	奥田 BF17・18	医療	奥田地区某幹塗場 附属病院連絡通路新設	10.2・3	1.5	造成土以下赤褐色土、青灰土 粘質土層、遺物なし
12	立会	津島北 AL14, AV13-14	四	因河原新宮に伴う仮設電柱設 置	10.3	1.7	木柱7ヵ所、径70cmのオ ガード樋附、4ヵ所は明治層 まで、他の是れ成土内。
13	立会	鹿田 CB71-72	ア	鹿田地区某幹塗場 アソート・ブロックセントー 焼却研究棟配管移設	10.6, 9		集水井2本は北1.9m、南0.8 m距離。造成土はGL-0.6m 以下、暗褐色灰色砂質土。配管 部は造成上内。

番号	種類	調査地区	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(m)	備考
14	立会	鹿田 CD07-08	医病	鹿田地区基盤整備 施設タンク設置工事	11.15	2.3	中世遺構面2面確認。第3条確認。 中世基盤層がしっかりと している。洞内から中世・古 代の土器出土。
15	立会	島山 AV43	事	海デジタルワーカー中国基地 局設置	12.15	1	自然地形のみ
16	立会	鹿田 C870	ア	鹿田地区基盤整備 アイソープ総合センター 統合研究棟ガラス埋設工事	1.29	1.1	造成土、既設工事内
17	立会	鹿田 CC-CD08~10	医病	鹿田地区基盤整備 附属施設埋設タンク U字溝埋設工事	2.14~19~20	1.2	包含層確認。中世の土器細片 採取。鐵部等、基礎などで汲 存部分は区間全長の1/2程度
18	立会	津島北 AW04~10	工	駐輪場設置に伴う樹木移植	2.15~16	0.5	造成土内
19	立会	鹿田 DF56~67	医	防球ネット取扱工事に伴う樹 木移植	2.19	0.7	造成土内
20	立会	鹿田 BZ71	医	鹿田地区基盤整備工事 アイソープ総合センター 統合研究棟配管工事	2.22	0.7	造成土内
21	立会	津島北 AW04	工	駐輪場設置工事	2.29	0.6	造成土内
22	立会	津島北 AW06	工	駐輪場設置工事	3.11	0.6	造成土内
23	立会	鹿田 DF56~67	医	防球ネット取扱工事	3.13	3	径80cmを12箇所、4箇所で土 器片、石器の採取あり。調査 区西寄りは、G.-2 m以下が旧 河底か。
24	立会	津島南 BD19, BB~ BD20	農業	動物実験棟新設に伴う電柱伐	3.29	1.4	明治~近世層まで掘削 段



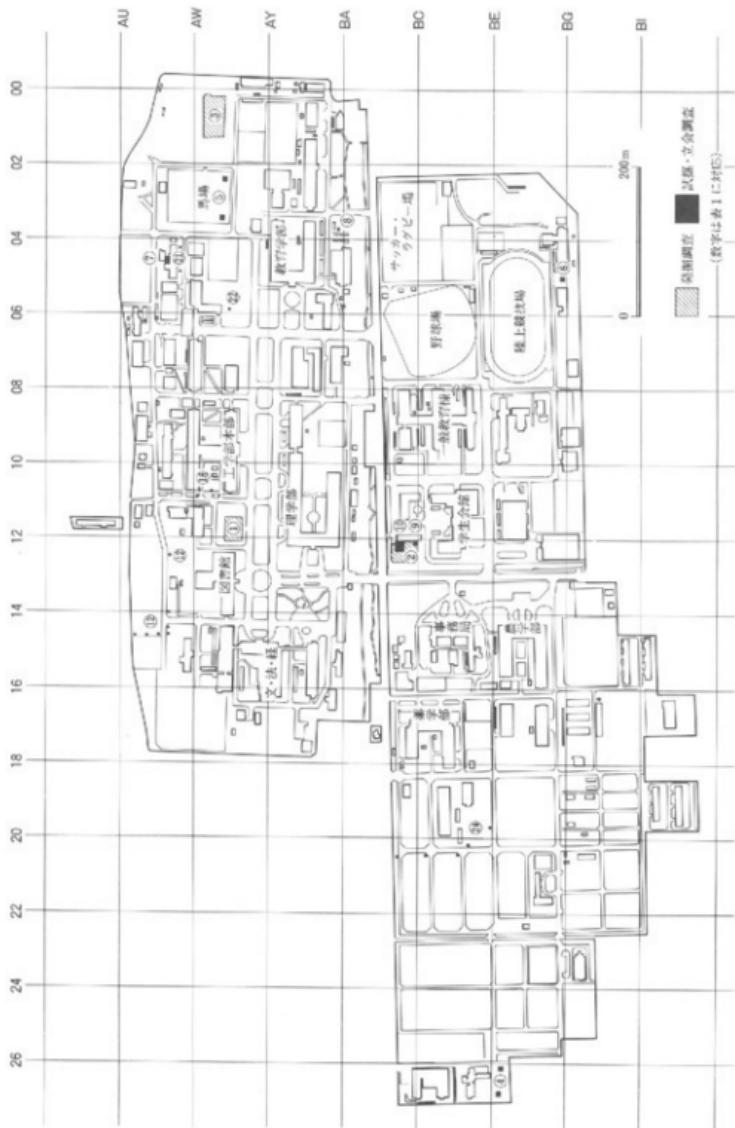


図26 今年度の調査(1) 津島地区 (縮尺1/7,500)

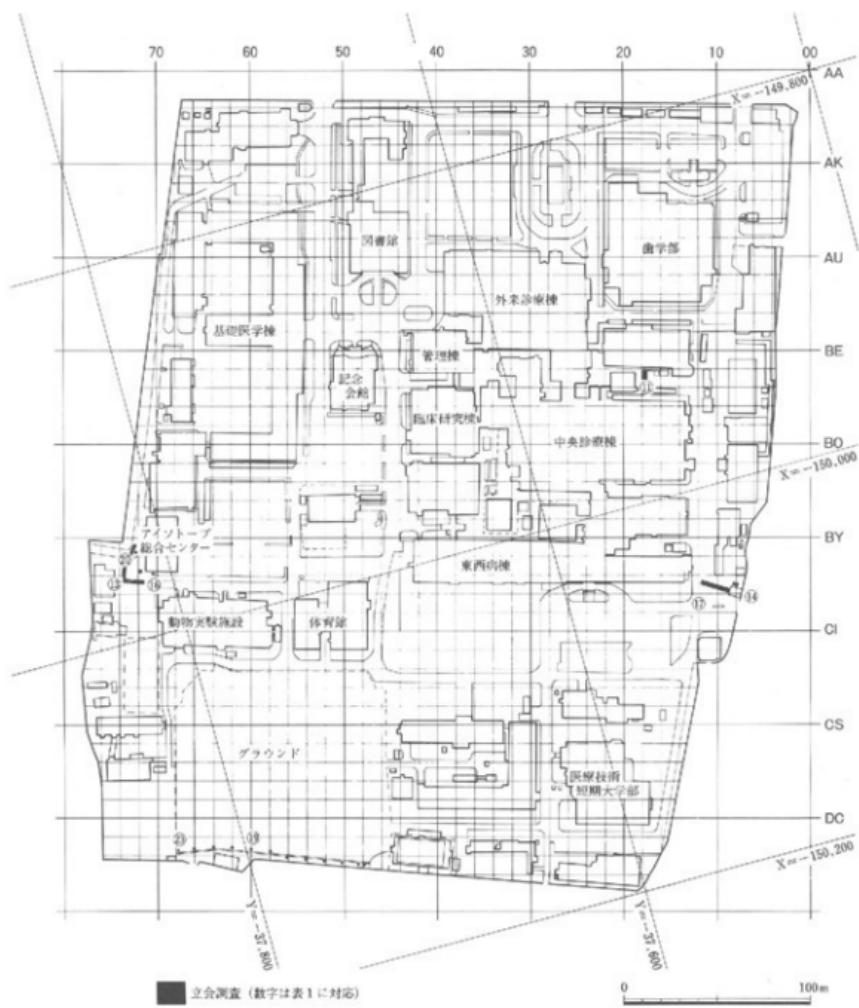


図27 今年度の調査(2)鹿田地区 (縮尺1/3,000)

第2章 1995年度普及・研究・資料整理活動

1 資料整理

本年は次の5件の発掘調査の資料整理を行った。

- ① 津島岡大遺跡第6次調査（工学部生物応用工学科棟）
報告書刊行
- ② 津島岡大遺跡第7次調査（工学部情報工学科棟）
報告書刊行
- ③ 鹿田遺跡第6次調査（アイソトープ総合センター）
遺物の実測・トレース・写真撮影、文章作成
- ④ 津島岡大遺跡第9次調査（工学部生体機能応用工学科棟）
遺物の注記・復元
- ⑤ 津島岡大第11次調査（総合情報処理センター）
報告書刊行

2 分析依頼

- ① 鹿田遺跡第6次調査出土種子の分析…岡山大学農学部 沖 陽子

3 刊行物

- | | |
|---------------------------|-------------|
| ① 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第14号 | 1995年10月 刊行 |
| ② 岡山大学構内遺跡調査研究年報 第12号 | 1995年12月 刊行 |
| ③ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊 | 1995年12月 刊行 |
| ④ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊 | 1996年2月 刊行 |
| ⑤ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号 | 1996年3月 刊行 |

4 調査員の活動

(1) 資料収集活動

岩崎志保

構内遺跡出土陶磁器の資料調査ほか：太宰府市教育委員会・七隈原ノ江遺跡ほか

画像石資料の査定：倉敷市大原美術館

光石鳴巳

湧別系細石刃石器群資料の実査：札幌大学・今金町教育委員会・明治大学
山本悦世

輸入陶磁器類の資料調査ほか：太宰府市教育委員会・菅原ノ辻遺跡ほか
横田美香

京都府向日市周辺の古墳踏査

(2) 学会・研究会等参加

岩崎志保

考古学研究会総会（7月），日本中國考古学会総会（9月）

光石鳴巳

考古学研究会総会（7月），中・西四国旧石器文化談話会（9月），近畿旧石器交流会（11月），東北日本の旧石器文化を語る会（12月），長野県旧石器文化研究交流会（2月）

山本悦世

日本考古学協会総会（5月），中四国縄文研究会（6月），考古学研究会（7月），埋蔵文化財研究集会（3月）

横田美香

考古学研究会総会（7月），埋蔵文化財研究集会（3月）

(3) 研究発表他

岩崎志保

「中国華北地方の墓制の変遷」考古学研究会例会（2月）

横田美香

「6・7世紀の須恵器の生産と流通」考古学研究会例会（4月）

(4) 論文・資料報告

光石鳴巳

『恩原2遺跡』岡山大学文学部考古学研究室（共著）

『恩原2遺跡における細石刃石器群の技術論的考察』『恩原2遺跡』

山本悦世

「備前地域における古代後半の土器様相」『津島岡大遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊

横田美香

『定北古墳出土陶棺の系列と編年』『定北古墳』岡山大学考古学研究室

『須恵器の年代』『定北古墳』岡山大学考古学研究室

5 日誌抄

1995年		
4月 1日	横田美香助着手任	
4月 3日	第1回月例会議 ・平成7年度事業計画・予算案	
4月13日	センター歓迎会	
4月26日	臨時会議 ・決算・予算案について ・発掘調査に係る物品購入について	
5月 8日	第2回月例会議 ・報告書作成進行状況	
5月10日	木器処理、PEG濃度を70%に上げる	
5月18日	運営委員会開催 ・平成6年度決算 ・平成7年度予算案 ・平成7年度事業計画	
5月24日	管理委員会開催 ・平成6年度決算 ・平成7年度予算案 ・平成7年度事業計画	
6月 1日	炉保存処理作業開始	
6月 2日	第3回月例会議	
6月14日	『津島岡大遺跡5』、センター報13号発送	
6月28日	津島岡大第13次調査打ち合わせ	
6月30日	木器処理、PEG濃度を75%に上げる	
7月 3日	第4回月例会議	
7月10日	津島岡大遺跡第13次調査再開	
8月21日	博物館災害開始 受講生41名	
8月31日	博物館実習終了	
9月 1日	第5回月例会議 ・調査報告	
9月 4日	国際交流文会館予定地試掘調査 (~7日)	
9月 7日	津島岡大第14次調査打ち合わせ	
9月12日	事務局第一会議室展示入れ替え	
9月21日	運営委員会開催 ・津島岡大第13次調査成果について ・福利厚生施設(南)の発掘調査開始について	
10月 4日	第6回月例会議 津島岡大第13次調査終了	
10月 6日	津島岡大第14次調査造成土取り開始	
10月25日	津島岡大第14次調査開始 鹿田外来株出土戸枠貸し出し (県立博物館へ)	
11月 6日	第7回月例会議 木器処理 PEG濃度を80%に上げる	
11月15日	津島岡大第15次調査打ち合わせ	
11月21日	環境理工学部棟予定地試掘調査 (~22日)	
11月29日	岩崎・山本、太宰府市教育委員会へ出張	
11月30日	岡山県立博物館より井戸枠返却	
12月 1日	第8回月例会議	
12月11日	津島岡大第15次調査造成土・堆土取り開始	
12月12日	センター建物内ワックスかけ	
12月15日	センター忘年会	
12月19日	運営委員会開催 ・助手及び技術補佐員の採用について ・平成7年度施設整備に伴う調査について ・運営委員の構成及び任命について ・津島岡大第14次調査の経過	
12月27日	大掃除	
12月28日	御用納め	
1996年		
1月 4日	仕事始め	
1月 5日	木器処理、PEG濃度を85%に上げる	
1月11日	第9回月例会議	
1月12日	年報12号納品	
1月16日	津島岡大遺跡第15次調査開始	
1月17日	『津島岡大遺跡9』納品	
1月18日	『津島岡大遺跡9』、年報12号発送	
1月24日	管理委員会開催	
2月 1日	第10回月例会議	
2月14日	津島岡大遺跡第14次調査終了	
3月 4日	第11回月例会議	
3月 7日	津島岡大第17次調査打ち合わせ	
3月18日	ボクシング部ボックス移設地試掘調査	
3月28日	センター報15号納品	
3月29日	津島岡大第16次調査打ち合わせ	

6 1995年度までの遺物保管状況

(1) 遺物収蔵量

1996年3月31日における本センターの遺物収蔵量は表2に掲げるとおりで、約30リットル収納のコンテナに換算すると2203箱である。昨年度に比較して500箱以上もの増加となった。発掘調査では津島岡大遺跡第13・14・15次調査を行っており、13次調査で17箱、14次調査で16箱分の遺物が出土した。第15次調査は1996年度4月まで継続した調査であり、355箱分の遺物が出土した。特に縄文時代後期・晚期の河道からの遺物が目立ち、なかでも河道及び貯蔵穴から採取した土壌サンプルや貯蔵穴内の堅果類はコンテナにして300箱を数えた。一方試掘・立会調査での出土遺物は少なく、昨年度までの収蔵量と大差ない。

(2) 遺物保管状況

現在、津島岡大第15次調査出土の土壌資料300箱は収蔵室の通路にまで置かざるを得ない状況である。この土壤に限っては洗浄作業の進行につれ、この状況はいずれ解消されることとなる。しかし、土壤以外の遺物については今後の整理分析作業により、最終的な収納形態を整えることになり、箱数は増加することが見込まれる。土壤以外の遺物については年々確実に箱数は増え続けており、近い将来、収納容量を超えることが予測される。

表2 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要

所属 種類	地 調 査 名 称	箱 数 (1箱: 約30ℓ)						備 考 主要時期・特殊遺物	文 獻
		總 數	上 器	石 器	木 器	その 他	サン プル		
医病	発掘 鹿田第1次調査(外来診療棟)	608	491	6	60	1 ガラス	50	弥生中期～中・近世 鉢甲狀・櫻状木蓋等	⑦
"	" 鹿田第2次調査(NMR-CT室)	116	90	3	20	銅 鐵 器	3	弥生後期～中世・田舟・木舟等	"
医歯	" 鹿田第3次調査(校舎)	131	36		90	鐵 銅 鐵 他	5	古代～中世	⑩
"	" 鹿田第4次調査(配答)	3	2				1	古代・鹿角製品	"
医病	" 鹿田第5次調査(管理棟)	119	79	1	20		19	弥生後期～中・近世	⑪
ア	" 鹿田6次調査 (アイソトープ融合センター)	30	29.5	0.5				中世・青銅製挽	⑫
全	" 津島岡大第1次調査(NP-1)	4			4			弥生中期～古代	⑬
農	" 津島岡大第2次調査 合併処理槽 排水管	18		1			4	縄文晚期～弥生初期	⑭
学生	" 津島岡大第3次調査 (男子学生寮)	71	49	10	2		10	縄文後期～弥生・古代～近世 石製指輪・蛇頭状土器片	⑮
"	" 津島岡大第4次調査 (屋内運動場)	1	1					縄文晚期～弥生前期 (試掘調査遺物を含む)	⑯

所属	種類	地 調 査 名 称	箱 数(1箱:約30kg)					備 考 主要時期・特殊遺物	文 獻
			総 数	土 器	石器	木器	その他 サンプル		
人自	発掘	津島両大第5次調査 (大学院自然科学研究科棟)	89	55	2			32	縄文後期～弥生、古代～近世 耳飾、木製櫛(繩文)
I.	"	津島両大第6次調査 (生物応用工学科棟)	63	30	1	22		10	縄文後期～近世 人形木器、アンペラ
"	"	津島両大第7次調査 (情報工学科棟)	13	7	1			5	縄文後期～近世
全	"	津島両大第8次調査 (遺伝子実験施設)	14	12.9	0.1			1	縄文後期～近世
工	"	津島両大第9次調査 (生体機能応用工学科)	258	35		3		220	縄文後期～近世
全	"	津島両大第10次調査 (保健管理センター)	55	40		5		10	弥生前期～近世
"	"	津島両大第11次調査 (総合情報処理センター)	4	2				2	縄文後期～近世
"	"	津島両大第12次調査 (宮古銀)	71	40	1	20		10	縄文後期～近世
"	"	津島両大第13次調査 (福利厚生施設 北)	17	17					縄文後期・古墳前期・中世
"	"	津島両大第14次調査 (福利厚生施設 南)	16	15				1	弥生～古墳
"	"	津島両大第15次調査 (サテライトベンチャービジネスラボラトリ--)	355	25	10	20		300	縄文後期・晩期・弥生～中世 アンペラ
医療	試掘	鹿田駐車場	1	1					弥生～中世
学生 教育	"	津島北 男子学生寮 " 研究棟	1	0.7	0.3				縄文後期～弥生前期
大自	"	自然科学研究科棟	1	1					縄文後期～弥生前期
事	"	津島 外国人宿舎(十生)	1	1					縄文～中世
運	"	津島北 身障者用エレベーター	0.3	0.3					中・近世
教養	"	津島南	0.7	0.7					縄文・中世
工	"	津島北 校舎	1	1					縄文～近世
農業	"	津島南 動物・遺伝子実験施設	0.7	0.7					縄文～弥生、中・近世
事	"	津島南 國際交流会館	0.3	0.3					中世
大自	"	津島北 合併処理槽	0.2	0.2					中・近世
学生	"	津島南 生育合宿所	0.4	0.2				0.2	中世
教育	"	津島北 身障者用エレベーター	0.3	0.3					縄文

所属	種類	地 調 査 名 称	箱 数 (1箱:約30ℓ)					備 考 主要時期・特殊遺物	文 獻	
			総 数	土 器	石 器	木 器	その 他	サンプル		
岡	試掘	津島北 図書館	0.8	0.8					古墳～中世	⑭
学生	〃	津島南 学生合宿所ポンプ槽	0.4	0.4					縄文～中世	⑯
資生	〃	倉 敷 資源生物科学研究所	0.1	0.1					近世	〃
ア	〃	龜 田 アイソートープ総合センター	1	1					中世～近世	〃
事	〃	津島北 福利厚生施設	0.5	0.5					弥生?～中世	〃
農	〃	津島南 動物実験施設	0.1	0.1					縄文?～近世	⑩
全	立会	'83年度	2	2					分銅形十製品	①
〃	〃	'84年度	1	1						②
〃	〃	'85年度	1	1						⑤
〃	〃	'86年度	0.5	0.5						⑥
〃	〃	'87年度	0.5	0.5						⑧
分布	〃	'89年度 三鶴・本島	0.3	0.3						⑩
全	立会	'91年度 '92年度	0.3	0.3						⑪ ⑫
〃	〃	'93年度 '94年度 '95年度	0.2	0.2						⑬ ⑭ ⑮
総 箱 数			2072.6	1085.5	36.9	286	1	683.2		

※文献番号は附表3・4に対応する。文献38は本年報13を指す。

7 遺物の保存処理

(1) 木器処理

1994年6月から開始した第2期分のPEG含浸処理は順調に継続中である。今年度の濃度上昇工程は以下のとおりである。

1995年5月10日 65・70% 6月30日 70→75% 8月31日 75・80%

11月6日 80・85% 1996年1月5日 85→90%

昨年度末に65%に上げた後、1ヶ月半～2ヶ月毎に5%ずつ濃度上昇を行った。濃度の上昇につれてPEGの溶け方が遅くなつたため、より時間をかけて含浸させることとした。そのため処理開始当初は今年度中の完了を予定していたが、90%までの上昇まで行ったところで、来年度に継続することとなった。

(2) その他の保存処理

①切り取り遺構の保存処理（写真15-A）

発掘調査中に現場で切り取り持ち帰った下記の2点の遺構について保存・収納可能な形態に整えるための作業を行った。

・津島岡大遺跡第7次調査（工学部情報工学科棟）炉1⁽¹⁾

当資料については1988年度に発泡ウレタンによる科学的保存処理を行っていた⁽²⁾。この時点では全6工程のうち仕上げの2つの工程を実施しないまま年月が過ぎていた。今年度は最終的な仕上げ処理、すなわち収納・展示可能にするための枠を取り付ける作業を行った。

・津島岡大遺跡第10次調査（保健管理センター）炉（土坑6）⁽³⁾

上記資料と同一の方法で、現場にて取り上げ保存していたものである。この資料についても同じく収納・展示可能な形態に整える作業を行った。作業前の状態はいずれも炉壁の周囲を和紙・ウレタン・ダンボールで保護したもので、まずこれらを剥がす作業から始めた（写真A1）。以下作業工程について記述する。

- 1 天地逆の状態で炉壁を出来る限り削る。もう一度和紙を貼る（写真A2）。
- 2 木枠をはめ込み、周囲に二種混合発泡ウレタンを注入する（写真A3）。
- 3 底板を取り付け（写真A4）、天地を戻す。
- 4 炉の上部を覆っているウレタンを除去（写真A5）。
- 5 炉壁の修復・クリーニングを行い、表面にペインダー溶液を塗布（写真A6）。
- 6 紙粘土で表面を仕上げ、着色（写真A7）。

どちらの資料も、現場での取り上げ時よりも軽量にすることに成功し、当初の目的である展示公開に向けての準備は整ったと言える。

②井戸枠の処理（写真15-B）

鹿田遺跡第1次調査（井戸4）⁽⁴⁾で出土した井戸枠（井筒）は、かなり大型の資料であるものの、自然乾燥が良好に進み、多少の木皮の剥落はあるが、極めて良好な状態で保存されてきた。今回、県立博物館への貸出依頼を受けるにあたって、これ以上の乾燥・劣化を防ぐため、表面のクリーニングと、表面保護用の薬剤塗布を行った。使用した薬剤はウッディプラスター（50%水溶液）である。まず小型のハケやブラシで表面のはこりを丁寧に除去し、その後保護剤を塗布した。処理後の状態は良好である。
（岩崎）

註（1）繩文時代後期『津島岡大遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊 1995 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（2）『岡山大学構内遺跡調査研究年報 6 1988年度』1989 p31-33 同上

（3）古代か『岡山大学構内遺跡調査研究年報 11 1993年度』1994 同上

（4）『鹿田遺跡I』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 1988 同上

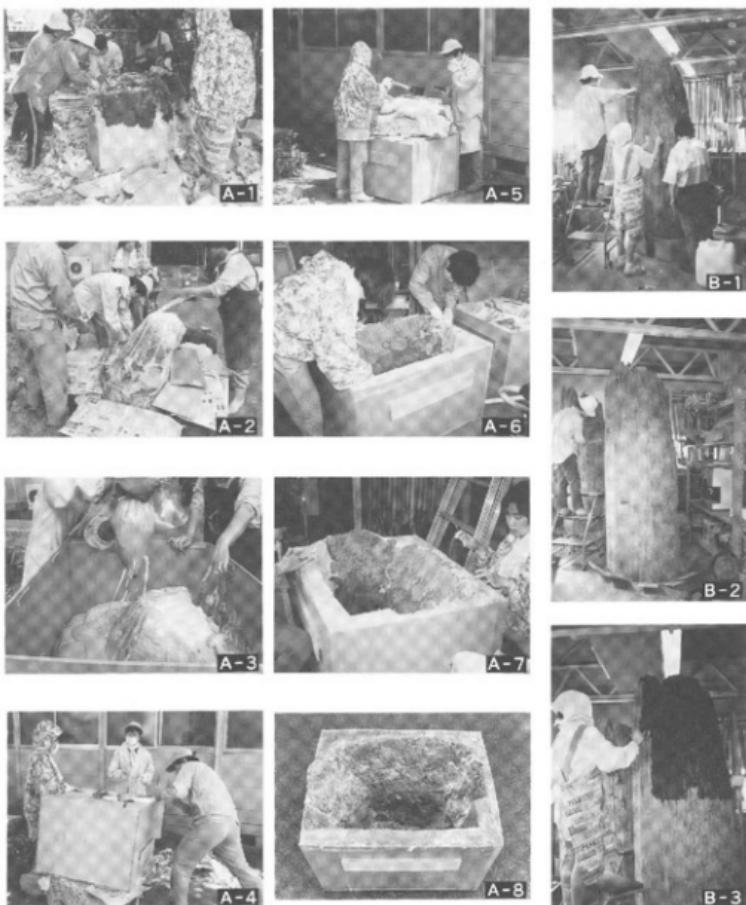


写真15 保存処理作業の経過 (A: 炉の処理, B: 井戸棒処理)

8 資料の貸出

貸出資料名(調査名)	点数	貸出期間・目的	貸出先
井戸棒(鹿田第1次)	一組 2点	平成7年10月28日～11月26日 特別展展示「水と暮らし」	岡山県立博物館

第3章 1995年度活動のまとめ

本年度は稻田孝司センター長以下、助手4名、技術補佐員1名の業務体制で、構内遺跡の調査及び整理分析作業を行った。今年度の発掘調査は年度当初に予定されていた福利厚生施設新館に伴う2件の調査、すなわち津島北地区の北桟（津島岡大遺跡第13次調査）、津島南地区の南棟（同第14次調査）に加えて、サテライトビジネスラボラトリー新館に伴う津島岡大遺跡第15次調査の計3件を実施した。第13次調査は昨年度2ヶ月行った後中断した調査を再開したものである。本年度は中世層以下の調査を実施し、弥生時代後期頃と考えられる大溝及び弥生～古墳時代初頭の溝群、弥生時代前期の水田畦畔、縄文時代のピット群などを検出した。調査地点は微高地上にかかる比較的安定した地形にあたり、周辺の既調査地点（第11・12次調査）の成果ともあわせて、津島キャンパス北西地区の資料蓄積が進んだ。第14次調査地点は保健管理センター（第10次調査）の西側である。集落の集中が期待される微高地ではなく、微高地から浅い谷部への移行部分にあたった。主要な遺構では、弥生時代の水田畦畔2面、弥生時代後期～古墳時代前半の溝群、古代・中世の溝群などを検出した。微高地に挟まれた深い谷地においても黒色土の堆積が確認され、その上面で水田畦畔を検出したことは、当該期の水田経営を考えるうえで有益な資料と言えよう。第15次調査は第3次調査地点に重複する形で実施し、中世耕作痕・溝、古代水田畦畔、弥生時代水田畦畔2面、縄文時代貯蔵穴・ピット群・堅穴住居状遺構などを検出した。特に縄文時代の成果は注目すべきものである。調査区北西部の河道には後期・突堤文期の貯蔵穴群を検出した。また微高地では調査区東端で検出した堅穴住居状遺構やサスカイト集積土坑の存在など、これまで希薄であった縄文時代後期段階の状況に関して極めて有益なデータを得ることができた。そのほか3件の試掘調査、立会調査も随時実施した。

室内の整理作業の成果としては『津島岡人遺跡6』・『津島岡大遺跡7』の2冊の報告書の刊行が挙げられる。1988年度に実施した工学部生物応用工学科棟・情報工学科棟の調査と1993年度に実施した総合情報処理センターの発掘調査成果をまとめたものである。定期刊行物では構内遺跡調査年報12、センター報14・15号を予定通り刊行した。年報12号には松谷曉子氏による構内遺跡出土試料（鹿田第1・5次調査、津島第7次調査）の灰像分析の成果を附録として掲載した。保存処理作業では継続中の木器処理のほか、炉・井戸枠の処理を実施した。

本年度は少人数としては定員減にもかかわらず、発掘3件・試掘3件と例年よりも多くの調査件数をこなし、2冊の報告書刊行等、充実した活動成果を得られた。また保存処理作業などから懸案事項も少しづつ解消しつつある。今後も学内・外を問わず、調査成果の公開等啓蒙活動を続け、より一層埋蔵文化財の理解を深めて行く必要がある。

（岩崎）

附 表

附表1 1982年度以前の構内主要調査(1980~1982年度)

年度	遺跡名 調査地区名	種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積(cm ²)	文献	備考
1980	鹿田	立会	歯	同附属病院棟新宮	岡山市教育委員会	8.0		
1981	津島南 BD26	"	腐	寄宿舎新宮	"			
	津島北	"	文法	合併処理槽埋設	"			
	津島北	"	文法	合併処理槽埋設 跡	"			
	津島南 BD09 BC09~11	"		萬能整備(共同譲取付)	"			
	津島南 BD~BE04~07	"		陸上競技場改修 (配水管埋設)	"			
	鹿田	"	医病	高気圧治療室新宮	"			
	"	"	動物	実験施設新宮	岡山市教育委員会		試掘調査をせず玻璃 残存壁面等の調査	
	"	"	病理	解剖体臓器処理保管 庫新宮	岡山市教育委員会			
	"	"	歯	運動場改修	"			
1982	津島 AY06-10 AW05-14 AX08,BD07 BE10	試掘		排水溝整備	"		津島AY14区で弥生時代 包含層確認、協議	
	小幡町日黒 津島北 AW14	免耕	法文	排水管集中槽(NP-1)埋設	岡山大学	24.0	③(津島興大第1次調査)	
	津島南	試掘	学生	武道館新宮	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北 AY15-16	"	法文	校舎新宮	"	7.0		
	施田	"	歯	標本保存庫新宮	岡山市教育委員会	8.0		
	"	"	医病	外来診療棟新宮	岡山市教育委員会	4.0	2	
	"	立会	医	動物実験施設関連排水 管・ガス管埋設	岡山市教育委員会		1	
	鹿田 AE~AN22 AE22~26	"	歯	電話ケーブル埋設	岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

参考文献 1 犀永真一「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新宮工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋文化財報告』13 1983 岡山市教育委員会

2 河本 浩「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋文化財報告』13 1983 岡山市教育委員会

③番号は附表3の番号に対応する。

附表

附表2 1994年度以前の構内主要調査（1983～1994年度）

附表2-(1) 発掘調査

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	調査期間	面積	概要	文献
2	1983	9	鹿田	AI～BD26～40	医病	外来診療棟新宮 〈鹿田第1次調査〉	7.27～11.22 '84.1.9～3.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址	⑦
3	1983	10	鹿田	BG～BII8～21	医病	NNR-CT室新宮 〈鹿田第2次調査〉	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落	⑦
10	1983	11	津島南	BE14～18 BF17～18 BH14～15	農	排水管埋設 〈津島岡大第2次調査〉	'84.1.9～3.5	265	縄文時代後期～弥生時代前期集落址	④
10	1983	12	津島南	BH13	農	合併処理槽埋設 〈津島岡大第2次調査〉	11.14～11.22 '84.1.9～3.5	276	縄文時代後期～弥生時代前期集落址	④
2	1984	3	鹿田	AI～BD28～40	医病	外来診療棟新宮 〈鹿田第1次調査〉	4.1～8.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址	⑦
31	1986	1	鹿田	CN～CL27～28 CT～CY19～27 CX～DD16～25 DD～DG22～23	医短	校舎新設 〈鹿田第3次調査〉	6.2～11.29	2390	古代～中世の集落址	⑩
35	1986	2	津島北	AV00 AW00-01	学生	男子学牛寮新宮 〈津島岡大第3次調査〉	12.1～'87.3.31	1550	古代～近代の水田址	⑨
38	1986	3	津島南	BF-BG09	学生	屋内運動場新宮 〈津島岡大第4次調査〉	'87.1.19～1.22	70	弥生時代前期溝、中世河道	⑥
36	1987	1	津島北	AV00 AW00-01	学生	男子学生寮新宮 〈津島岡大第3次調査〉	4.1～6.18	1550	縄文後期～弥生の集落址	⑨
36	1987	1	津島北	AV00 AW00-01	学生	男子学生寮新宮 〈津島岡大第3次調査〉	8.24～9.5	80	縄文後期～晩期の河道	⑨
52	1987	2	鹿田	BB～BH35～42	医病	管理棟新宮 〈鹿田第5次調査〉	10.6～'88.3.2 '88.3.23～3.31	1192	弥生中期後半～中・近世集落址	⑩
54	1987	3	鹿田	DD～DF25 DG～DI27～28	医短	校舎周辺の配管 〈鹿田第4次調査〉	11.2～11.21	30	古代の河道	⑩
65	1988	1	津島北	AY06～08 AZ06～07	大自	自然科学研究科棟 〈津島岡大第5次調査〉	6.27～'89.3.19	1537	縄文後・晩期の貯蔵穴と河道 弥生～近世の水田址	⑩
67	1988	2	津島北	AV-AW04-05	工	生物応用工学科棟 〈津島岡大第6次調査〉	9.20～'89.3.31	600	縄文後・晩期の貯蔵穴と河道 弥生～近世の溝と水田	⑩
70	1988	3	津島北	AV-AW05-06	工	情報工学科棟 〈津島岡大第7次調査〉	10.12～'89.3.31	800	縄文後・晩期集落址 弥生～近世水田址	⑪
67	1989	1	津島北	AV-AW04-05	工	生物応用工学科棟 〈津島岡大第6次調査〉	4.1～5.31	600	縄文後・晩期の貯蔵穴と河道 弥生～近世の溝と水田	⑩

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	調査期間	面積	概要	文献
65	1990	1	津島北	AY-AZ08	大日	自然科学研究科棟 〈津島岡大第5次調査〉	4.3~4.21	90	古墳時代後期溝	⑩
92	1990	2	鹿田	BW~CC67~71	ア	アイソトープ総合センター 〈鹿田第6次調査〉	11.20~ '91.3.31	890	縄文時代溝・井戸・建物群	⑩
92	1991	1	鹿田	BW~CC67~71	ア	アイソトープ総合センター 〈鹿田第6次調査〉	4.1~6.30	690	縄文時代溝・建物群；土器ほか；弥生~古墳時代溝・土壇；土器	⑪
96	1991	2	津島南	BB18~19	農	遺伝子実験施設 〈津島岡大第8次調査A地点〉	7.23~12.25	650	弥生時代~近世溝等、繩文時代土壇・石壇他	⑩
96	1991	3	津島南	BB13	農	(合併処理地) 〈津島岡大第8次調査B地点〉	7.23~12.2	140	古代~近世水田 弥生土壇・石壇他	⑪
104	1992	1	津島北	AB~AW04	工	生体機能応用工学科棟 〈津島岡大第9次調査〉	7.1~'93.1.29	650	繩文後・晚原の貯蔵穴と河道ほか、弥生~近世の溝と水田址	⑫
108	1992	2	津島南	BB~BC10~11	保	保健管理センター 〈津島岡大第10次調査〉	'93.2.1~3.31	400	近世耕地・野菜ほか、'93年度に廃続	⑬
108	1993	1	津島南	BB~BC10~11	保	保健管理センター 〈津島岡大第10次調査〉	4.17~7.31	400	弥生時代後期土壇等；弥生~古墳時代井戸・土壇；古墳時代住居址ほか	⑭
115	1993	2	津島北	AV~AW11~12	情	総合情報処理センター 〈津島岡大第11次調査〉	9.14~'94.1.11	640	繩文後期~弥生前期窓穴状構造、弥生中期水田址、古墳時代水田址ほか	⑮
127	1993		津島北	AV~AW13~14	園	園芸館 〈津島岡大第12次調査〉	'94.2.9~3.31 4.1~11.30	1472	繩文時代土坑、弥生~古墳時代水田畠跡、古代溝・堆肥、中巨溝ほか	⑯
134	1994	2	津島北	AW~AX11~12	事	福利厚生施設北棟 〈津島岡大第13次調査〉	10.6~11.30	816	近代耕作面。'95年度に廃続	

附表2-(2) 試掘調査

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
4	1983	1	津島南	BB13	農	合併処理槽予定地	2.5		弥生・前期土器片('83年度発掘)	①
5	1983	2	津島南	BF17	農	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5			①
8	1983	3	津島南	BE~BG14 BE-BH15 BH1 8 BF16~18	農	排水管理設予定地	2.0		弥生・前期土器片('83年度発掘)	①

附表

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
11	1983	8	津島北	AW05	工	校舎新宮予定地	3.0	1.0	土器片出土	①
12	1983	5	津島南	BC-BD15	事	大学事務局新宮予定地	2~3	0.9	土器片出土	①
13	1983	6	津島南	BB10	保	保健管理センター新宮予定地	2~3	0.8	溝検出	①
14	1983	4	津島南	BF22-23	農	農場畜舎新宮予定地	2~3	0.6	土器片出土(1987年度工事立会)	①
14	1983	7	津島南	B116	事	津島宿舎新宮予定地	2.0	0.9	土器片出土(1987年度工事立会)	①
21	1984	1	鹿 田	BU30-31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	0.5~0.7	中世土器・包含層確認(盛土保存)	②
22	1984	2	鹿 田	CT-CU25 CZ19-20-23-24	医病	医療短期大学部校舎新宮予定地	2.7	0.8~1.0	中世・古代の遺物出土(1986年度免掘調査)	②
23	1985	3	津島北	AV-AW99~01	学生	男子学生寮新宮予定地	2~3	1.0	繩文～中世の遺構・遺物(1986年度免掘調査)	⑤
24	1985	2	津島北	AX02	教育	研究棟予定地	2.6~3.4	1.2	繩文～弥生時代土器出土	⑤
25	1985	1	津島南	BE08	教育	講義棟予定地	3.5	1.2	遺構・遺物未確認(1986年度工事立会)	⑤
29	1985	4	鹿 田	AJ33 AJ40 AJ-AK26	医病	外来診療棟廁場整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2~3	0.9~1.4	弥生～中世の遺物	⑤
35	1986	3	津島南	BF-BG09	学生	屋内運動場新宮予定地	2.4 1.2~1.7	1.1	弥生初期鶴・中世河差検出(1986年度免掘調査)	⑥
37	1986	4	津島北	AY-AZ07	大自	自然科学研究科棟新宮予定地	1.6~3.2	0.6~0.8	繩文中期末～後期の遺構・遺物(1988年度免掘調査)	⑥
45	1987	4	土 生	AP02	事	外国人宿舎建設予定地	2.2~2.8		近世・弥生・繩文の遺構面確認	⑧
46	1987	5	津島北	AV11	情	総合情報処理センター新宮予定地	2.0~3.0	2.0	黒色土を標高2.2m前後で確認	⑧
48	1987	6	津島北	AY09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0~3.5	約1	近世・中世の遺物 中世・古代の水田址(継続して免掘調査に及ぶ)	⑧
49	1987	7	津島南	BD09	教養	身体障害者用エレベーター建設予定地	2.5	0.7	繩文時代土礫群を確認 繩文・中世・近世土器出土(継続して免掘調査に及ぶ)	⑧

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
61	1988	17	津島北	AX04-06 AW04	工	校舎建設予定地	2.0~3.5		黒色土を標高3m弱で 確認 槽状遺構・本田 址検出 繩文~近世上 器出土 (1988年)	⑪
62	1988	19	津島南	BD18-19	農・ 園	動物実験飼育施設及び遺 伝子実験施設	2.3	1.1~1.2	黒色土を標高約2.3m で確認 槽状遺構・縄 文~中世遺物検出	⑫
63	1988	20	津島南	BC29	事	国際交流会館	2.5	1.2	近世・中世の遺物出土 (1988年度工事立会)	⑬
77	1989	3	津島北	AZ17	大自	合併処理槽設置予定地	4.0	1.6~2.0	中世~明治の水田の跡 跡・溝 (1989年度工事立 会)	⑭
78	1989	4	津島南	BD02	学生	学生合宿所予定地	2.0~3.2	1.0	縄文晚期~弥生前期の 跡跡 (1989年度工事立 会)	⑮
79	1989	2	津島南	AZ-BAD5	教育	身体障害者用エレベー ター	2.5	0.8	縄文時代後~晩期の落 込み 縄文時代後期~ 中世土器片 (小瓶底発 掘, 面積38.5m ²)	⑯
83	1989	5	津島北	AV-AW13	図	図書館新館予定地	3.0	1.4~1.6	古代水田, 弥生~古代 の溝	⑰
87	1990	3	津島南	BC02	学生	学生合宿所ポンプ池予定 地	2.5	1.1	弥生時代前唐吐跡, 中 世土器片	⑱
89	1990	4	倉敷地 区		資生	資源生物科学研究所遺跡 確認調査	2.5	0.7	中世後半以降土器片	⑲
90	1990	5	鹿田	BY-B268	ア	アイソトープ総合セン ター予定地	2.3	1.2~1.3	中世土質質土器など (1990・91年度発掘調 査)	⑳
91	1990	6	津島北	AW-AX11	有	福利厚生施設予定地	3.0	1.4~1.6	弥生~古墳時代の溝, 中世土器小片	㉑
121	1993	3	津島南	BE~BF・22~ 23	農	農学部汎用耕地実験実習 施設	1.5		中~近世耕土	㉒
136	1994	3	津島南	BD20	農園	動物実験施設	2.0	0.9	GL 1.4mで黒色土, 縄 文土器一点出土	

附表2-(3) 立会調査

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
1	1983	13	東山		教育	附属中学校新館	4~5		シルト層巾	①
6	1983	23	鹿田	A0~AW22	医病	外木診療棟高気配管埋設	1.3		弥生後期土器(分銅形 土器)具集積	②

附表

総合 番号	年度	香号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
7	1983	24	津島南	BC~BF18	墓	周辺排水用集中槽埋設	2.5			①
7	1983	24	津島南	BC~BF18	墓	水道管埋設	1.5			①
9	1983	25	津島北	BA13	事	西門機架改修	2.6			①
16	1984	10	津島北	AW~AX11 AZ~BA12~13	情	総合情報センター・通信用 竹路埋設	0.7~1.4	0.9~1.2		②
17	1984	15	鹿 田	DB29	医病	看護婦宿舎前水道管修繕	2.0	1.15	中世包含層確認 中世・ 弥生土器	②
18	1984	17	津島南	BI16	事	非常勤講師宿泊施設新設	1.6	1.0		②
19	1984	20	津島南	BI15	事	南宿舎合併処理槽開発	2.0			②
20	1984	20	津島南	BI15~17	事	南宿舎合併伊地甌槽開発配 水管埋設	1.0~2.2	1.0	溝・土壤検出 須磨器・ 弥生土器	②
26	1985	6	鹿 田	AM~BH23 BH~B124	医病	外来診療棟間係屋外排水 水管埋設	1.3~1.7	0.7~1.3	中世・弥生の遺構・遺 物確認	⑤
27	1985	13	鹿 田	AK~AM43~46 AO~AT42他	医	基幹環境整備給排水その 他の工事	1.0	0.8	近世土器割り検出	⑤
28	1985	14	津島北	AV06~07	T	三次元換新設および排水 管埋設	1.5~1.7	1.0~1.5	土器細片出土	⑤
30	1985	12	鹿 田	AG31 AG24 AF23	医病	基幹環境整備給排水工事 電気配線ハンドホール掘 削	1.2~1.7	0.9~1.3	中世包含層・ピット	⑤
32	1986	9	鹿 田	BI~BH45	灰	排水・汚水管改修	0.8~1.3	0.8		⑥
33	1986	12	津島南	BE08~09	教養	校舍新設	2.3	1.3	中・近世土器・構	⑥
34	1986	13	鹿 田	CL28~CW28	医施	校舍新設設備	0.5~1.2	0.8~0.9		⑥
39	1986	20	津島北	AV16~17	文	グランド改修	3.5	1.5		⑥
40	1986	21	津島南	BG08	学生	ハンドボールコート新設	0.2~2.0	0.8	黒色土確認	⑥
41	1986	22	津島北	AX16	文	動物実験室新設	0.95		造成土内	⑥
42	1986	24	鹿 田	CL~CR12 CR~CX13 CX~DA14	医施	護岸及び圍壁工事	2.0	0.8~1.0	中世包含層	⑥
43	1986	26	津島南	BF07~08	教養	校舍新設に伴う電気配管	1.8	0.9	中世包含層	⑥
44	1987	8	鹿 田	BC37	医病	管理棟新設に伴う基礎杭 確認	2.5		弥生時代包含層・遺構 確認	⑥
47	1987	10	津島北	AY09	理	身体障害者用エレベー ター設置に伴う污水管移 設	1.2~1.6	1.0前後		⑥

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
50	1987	4	土牛	AQ02・03	事	土牛宿舎外排水管改修	0.7	0.6		⑧
51	1987	16	津島北	AW02	学生	馬場東給水管修理	2.0	0.96	谷部分	⑧
53	1987	18	津島南	BF22・23	農	農場施設新築その他工事	1.8	1.25		⑧
55	1987	17	鹿田	CW14～17	医短	校舎新築 配管	1.3	1.16	中世水田層	⑧
56	1987	18	津島南	BG22	農	農場施設新営合併処理槽	3.6	1.2		⑧
57	1987	18	津島南	BF17～21	農	農場施設新営電気	0.7～1.5	1.2		⑧
58	1987	18	津島南	BF22	農	農場施設新営給排水	3.0	1.3		⑧
59	1987	23	鹿田	CH-C156・57	医	動物実験施設焼却炉	0.3～1.2	0.8		⑧
60	1988	7	津島北	AY11・AZ11	情	情報処理センター通信線 付設	1.2	0.8～0.85		⑩
64	1988	10	津島北	AZ06	大自	大学院新館に伴う電柱架 設	2.3	0.8		⑩
66	1988	17	津島南	BF-BG10・11	教養	テニスコート夜間照明施 設	2.2・1.4～ 1.5	1.5	黒色七を表し下約2m で確認 西に向かう落ち ものが推定される	⑩
68	1988	20	津島南	BB25・26	事	国際交流会館 電柱架設	1.7～1.9	1.0	以下は灰色粘土	⑪
69	1988	19	津島南	BC26	事	国際交流会館 本体部分	1.0・2.4～ 2.9	1.5		⑪
71	1988	23	津島南	BB26	事	国際交流会館 合併処理 槽	2.2	1.3		⑪
72	1988	32	津島北	AB09・10	工	機械工学科・精密応用科 学科 実験棟電気改修	1.4～1.6	1.4		⑪
73	1989	7	津島北	AZ09 BA-BB09	大自	自然科学研究科棟新館 電柱架設	1.8～2.2	1.0		⑪
74	1989	8	津島北	AZ08	大自	自然科学研究科棟新館 工事用道路	1.4		弥生後期水田 近世鴨 橋出	⑪
75	1989	10	津島北	AU04・05	T.	生物応用工学科棟新館 電 柱架設	1.5～1.9	0.7～1.2		⑪
76	1989	12	津島北	AV06	T.	情報工学科棟地下部分掘 削	6.0		標高-0.5mまで掘削 遺物無	⑫
80	1989	46	鹿山	CE30・37・44 CJ・CK45 CL28・29	医病	脳血管疾患治療装置 外灯基礎掘削	1.2～1.5	0.7～1.0	中世層確認	⑬
81	1989	21	津島北	AY17	大自	合併処理槽 地質調査	2.3	2.0		⑬

附表

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
82	1989	18	津島南	BC02		市道拡幅補償工事 学生 合宿所新設	1.2	1.2		⑩
84	1989	23	津島北	AY17	大自	合併処理槽 本体部分掘 削	3.0		〈1989年度試掘調査〉	⑩
85	1990	12	津島北	AV04～10		岡山市道本町津島東線拡 幅に伴う補償工事Ⅰ 電 柱移設	0.4～3.0	0.6～1.4	黒色土層 条里帶？	⑩
86	1990	10	津島北	BD03～04	教養	グラウンドシャワー・空新 管	1.5～1.2	0.9～1.2	条里名残？	⑩
88	1990	20	津島北	BC02～04 BD03～04		岡山市道本町津島東線拡 幅に伴う補償工事Ⅰ 学 生合宿所給排水管設置	1.3	1.2	GL-2.3mで黑色土層	⑩
93	1990	36	津島南	BB14	事	事務局敷地内排水管修繕	0.3～1.5	0.8		⑩
94	1990	37	津島北	AV01～03AT03		岡山市道本町津島東線拡 幅に伴う補償工事Ⅱ	0.7～1.5	0.7～0.8	東端で条里の名残？	⑩
95	1991	9	津島南	BC18	遺	防火用水撤去	2.0	0.8	以下基盤層まで 遺物 出土	⑩
97	1991	14	津島南	BC18	事	津島地区基幹整備(電気) 配管	0.7		GL-0.5mで明治層上面	⑩
98	1991	21	鹿 田	CT44	医	水道管破裂	0.9	0.9	近世層上面まで	⑩
99	1991	17	津島南	BB16	事	津島地区基幹整備(電気) ハンドホール・アース板	1.7～1.8	0.5	明治層～淡灰色粘土層	⑩
100	1991	16	津 島	AV05-09 AX12 AW-AY05 BF16	事	津島地区基幹整備(電気) ハンドホール	1.1～1.3	1.0前後	近世層上面	⑩
101	1991	19	津島北	BD15	事	津島地区基幹整備(電気) アース板埋設	1.7	1.0	GL-1.5mで黑色土上面	⑩
102	1991	40	津島南	BC-BE-BF12	事	南北道路街灯設置	1.5		GL-1.4mで古代層確認	⑩
103	1991	35	鹿 田	BK～BX43～54	医	医学部基幹整備 木銀灯 設置	1.0～1.5		GL-1.0mで近世層上 面, -1.3mで中世層	⑩
105	1992	15	津島南	BD18-19	遺	遺伝子実験施設ハンド ホール設置	0.7～1.5		GL-0.75m～-1.1mで 明治層上面 織文後期 層まで, 槌2本検出	⑩
106	1992	25	津島南	BG12	事	仮設電柱設置	1.2		GL-1.1mで明治層上面	⑩
107	1992	28	鹿 田	BU65 BU-BC66 BC67-72 BW-CAT1	ア	アイソトープセンター集 水栓・ヒューム管設置	1.4～1.5		GL-0.9mで明治層上 面, 中世層1	⑩
109	1992	33	津島北	AV09	工	ボイラー系統水管改修工 事	1.2		GL-1.1mで明治層上面	⑩

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
110	1992	34	津島北	AV12	事	附属図書館北側駐車場整備	3.0	1.7	造成土以下粘土層	◎
111	1992	37	津島南	BB-BD-BE12	事	下水道事業に関する地質調査	1.1~1.5	1.1~1.4	明治層まで	◎
112	1992	40	鹿 田	CC7~C172	医	動物実験施設西側環境整備	1.1~1.3	1.1	近世層?まで	◎
113	1992	41	鹿 田	C173	医	テニスコート脇電柱埋設	1.2	1.0	古代土器1点	◎
114	1993	5	津島北	AU10	理文	沈殿池設置	0.85	0.85	灰褐色粘土層上面	◎
116	1993	13	津島北	AV04	工	生体標記応用工学科棟外構工事	0.5~1.0	0.7~0.8	明治層・近世層確認	◎
117	1993	14	津島北	AZ03	教	電柱埋設	1.0	0.6~1.0	明治層まで	◎
118	1993	17	津島南	BB~BC-10~12	保	保健管理センター新館に伴う外構工事ほか 電気配線	1.8	0.6~0.7	明治層、以下保健管理センター本調査と同じ層序、黒褐色土は-1.15~1.7m、その直下に茶色土層	◎
119	1993	23	津島北	BA07	事	津島地区基幹整備 R1 共同利用施設排水処理施設設置	3.2		明治~中世層 灰褐色土層確認 古代溝?; 繩文晚期? 土器片1	◎
120	1993	28	津島南	BD~BE13	事	津島地区環境整備 南北道路沿水路ボックスカルバート敷設	1.5	1.0	明治層、中世~近世層を確認	◎
122	1993	39	津島南	BB05~07 BC05 41	学生	野球場バックネット他改修	2.0~3.2	1.0	-1.2~2.0m付近で黒色土を確認; 以下は黄色砂~青灰色粘土	◎
123	1993	18	津島南	BC11	保	保健管理センター新館に伴う外構工事ほか 電柱設置	1.2	0.8	明治層・近世層確認	◎
124	1993	33	津島南	BB~BG-12~13	事	津島地区環境整備 水銀灯設置	1.8	0.5~1.2	明治層、以下近世~中世層一部で黒褐色土層を確認	◎
125	1993	19	津島南	BB11	保	保健管理センター新館に伴う外構工事ほか 旧棟改修	1.1	0.8	明治層、確認 赤土土器片	◎
126	1993	34	津島市	BD~BE-12~13	事	津島地区環境整備 信号機設置	1.6	1.0	明治層、以下近世~中世層一部で黒褐色土層	◎
128	1993	49	鹿 田	DG68~75	医	テニスコートブロック搬他改修	0.9~1.0	0.8~0.9	明治層確認	◎

附表

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	削削深度	造皮土厚	概要	文献
129	1994	5	鹿田	BD80~62	医	護岸改修工事	1.5	0.8	造成土以下明治・近世？層各一層、以下はすべて遺構埋土の可能性あり。溝3条、ピット9確認。	◎
130	1994	7	津島北	AV11	情	総合情報処理センター工事用スロープ設置	1.2	1.2	明治層上面まで	◎
131	1994	9	沖島南	BD-BE-BP04~07	事	陸上競技場照灯設置	2	0.96	照明ポール（深80cm～深さ10m）オーバー掘削 GL-1.92～2.00mで黒色土確認。	◎
132	1994	12	津島北	AW07	工	電気電子棟～精密志川化学棟外溝（ハンドホール）	1.45	1.2	近世層まで	◎
133	1994	13	津島北	AV10-AW10-AU11	情	総合情報処理センター新営電気工事	2.2	1.5	明治1面、近世2面、中世（近世か？）1面、近世溝確認。GL-1.7で黒色土確認。	◎
135	1994	18	津島北	AZ08	理	理学部ヘリウム液化装置室改修その他工事	1.3	1	造成土以下、黄褐色土、灰褐色粘質土層確認。遺物はなし。	◎
137	1994	20	津島南	BD20	農	施肥場	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土確認。	◎
138	1994	21	津島北	AD05～AV05	市	地域学習センター改修電気工事（ハンドホール）	1.1	1.1	明治層上面まで	◎

※免掘調査・試掘調査については全てを、立会調査については主要なもののみを対象としている。

文献番号は附表3・4に対応する。

附表3 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名 称	発行年月日
①	岡山大学構内遺跡調査研究年報1 1983年度	1985年2月28日
②	岡山大学構内遺跡調査研究年報2 1984年度	1985年3月30日
③	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月7日
④	岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ(農学部構内BH13区他) 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月31日
⑤	岡山大学構内遺跡調査研究年報3 1985年度	1987年3月31日
⑥	岡山大学構内遺跡調査研究年報4 1986年度	1987年10月31日

附表4 埋蔵文化財調査研究センター刊行物

番号	名 称	発行年月日
⑦	鹿田遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊	1988年3月31日
⑧	岡山大学構内遺跡調査研究年報5 1987年度	1988年10月31日
⑨	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号	1988年10月
⑩	鹿田遺跡Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊	1990年3月31日
⑪	岡山大学構内遺跡調査研究年報6 1988年度	1989年10月14日
⑫	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号	1989年8月
⑬	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号	1990年2月
⑭	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月20日
⑮	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号	1990年7月
⑯	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号	1991年3月
⑰	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号	1991年8月
⑱	岡山大学構内遺跡調査研究年報8 1990年度	1991年12月10日
⑲	津島岡大遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊	1992年3月31日
⑳	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第7号	1992年3月
㉑	岡山大学構内遺跡調査研究年報9 1991年度	1992年12月21日
㉒	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号	1992年8月
㉓	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第9号	1993年3月
㉔	鹿田遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6冊	1993年3月31日

附表

番号	名 称	発行年月日
㉙	岡山大学構内遺跡調査研究年報10 1992年度	1993年12月20日
㉚	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第10号	1993年11月
㉛	津島岡大遺跡 4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊	1994年3月31日
㉜	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号	1994年3月
㉝	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第12号	1994年10月
㉞	岡山大学構内遺跡調査研究年報11 1993年度	1995年2月
㉟	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第13号	1995年3月
㉟	津島岡大遺跡 5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊	1995年3月31日
㉢	岡山大学構内遺跡調査研究年報12 1994年度	1995年12月
㉣	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第14号	1995年10月
㉤	津島岡大遺跡 6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊	1995年12月
㉥	津島岡大遺跡 7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊	1996年2月
㉦	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号	1996年3月

1995年度までの調査地点

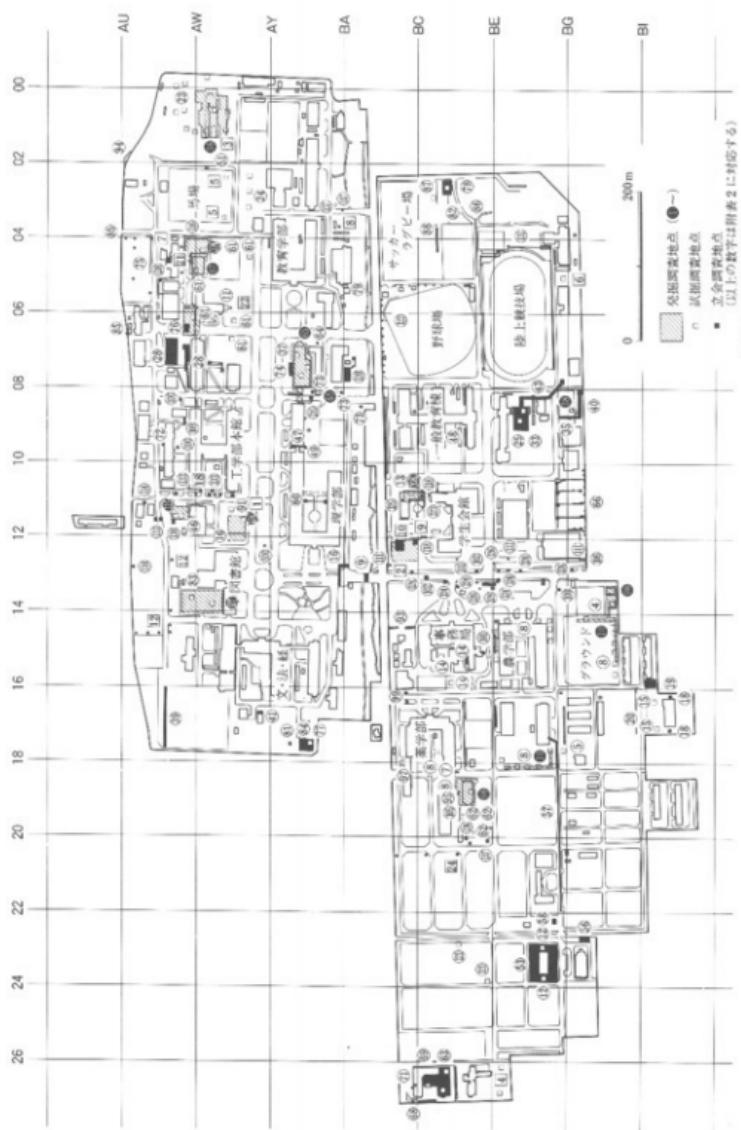


図28 1995年度までの調査地点(1) 津島地区 (縮尺1/5,500) [1-26 1995年度調査地点]

1995年度までの調査地点

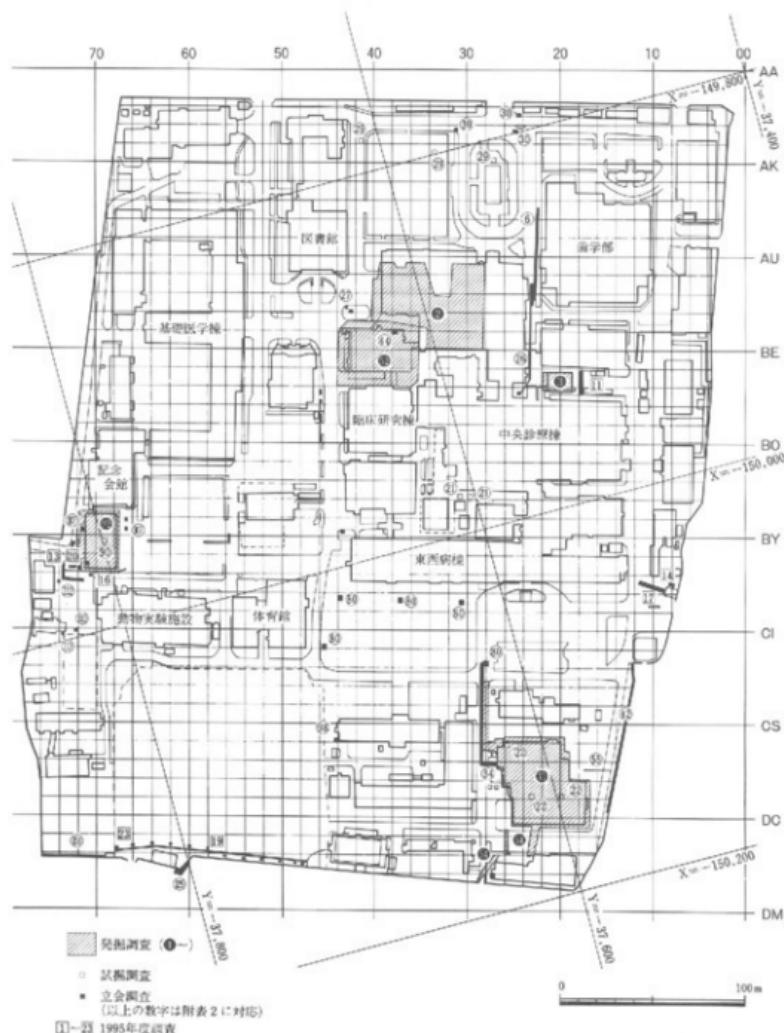


図29 1995年度までの調査地点(2) 鹿田地区 (縮尺1/3,000)

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

I 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程 (設置)

第1条 岡山大学(以下「本学」という。)に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に關すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に關すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に關すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に關する重要な事項

(自己評価)

第2条の2 センターは、岡山大学学則(昭和26年岡山大学規程第32号)第1条の2の定めるところにより、センターの係る点検及び評価(以下「自己評価」という。)を行うものとする。

2 前項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会(以下「自己評価委員会」という。)を置く。

3 自己評価委員会に関する規程は、別に定める。

附 則

この規程は、平成5年2月25日から施行する。

○岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価を行うこととするため。

(センター長)

第3条 センターにはセンター長を置く。

- 2 センター長は、専門的知識を有する本学の教授の中から学長が命ずる。
- 3 センター長は、センターに關する業務を掌理する。
- 4 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第4条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

- 2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。
- 3 室長は、専門的知識を有する本学の教官の内から学長が命ずる。
- 4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。
- 5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るために、調査研究専門委員(以下「専門委員」という。)を置く。

- 2 専門委員は、本学の教官の内から学長が命ずる。
- 3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

（管理委員会）

第6条 本学に、センターの管理運営の基本方針を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

2 管理委員会に関する規程は、別に定める。

（運営委員会）

第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関する規程は、別に定める。

（事務）

第8条 センターの事務は、施設部企画課において処理する。

（趣則）

第9条 この規程に定めるものほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2 この規程施行後最初に任命されるセンター長、室長及び専門委員の任期は、第3条第4項、第4条第5項及び第5条第3項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図るため、学内施設として、新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程

（趣旨）

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第6条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に掲し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第2条 管理委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

（組織）

第3条 管理委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 学長
- 二 各学部及び教養部長
- 三 自然科学研究科長
- 四 資源生物研究所長
- 五 附属図書館長
- 六 各附属病院長
- 七 地球内部研究センター長
- 八 学生部長
- 九 医療技術短期大学部主事

十 事務局長

十一 埋蔵文化財調査研究センター長

(委員長)

第4条 管理委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、管理委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(幹事)

第6条 管理委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(庶務)

第7条 管理委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に関し、必要な事項を定めるため。

3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

(趣旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第7条第2項に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関する、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の如に掲げる委員で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 本学の教授のうちから学長が命じた者若干名

三 センターの調査研究専門委員から学長が命じた者1人

四 センターの調査研究室長

五 施設部長

2 前項第2号の任期は、1年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

(庶務)

第6条 運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附則

1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2 この規程施行後最初に任命される第3条第1項第2号の委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に関し、必要な事項を定めるため。

4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程

(趣旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第2条の2第3項の規定に基づき、岡山埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係る点検及び評価の実施に関し、必要な事項を審議する。

(組織)

第3条 委員会は次の各号に掲げる者で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長

三 センターに勤務する教官のうちから若干名

四 埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員のうちからセンター長が委嘱した者若干名

五 施設部長

2 前項に定める委員のはか、センター長が必要と認めた者を加えることができる。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

(会議)

第5条 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(庶務)

第6条 委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第7条 この規程に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、別に定める。

附則

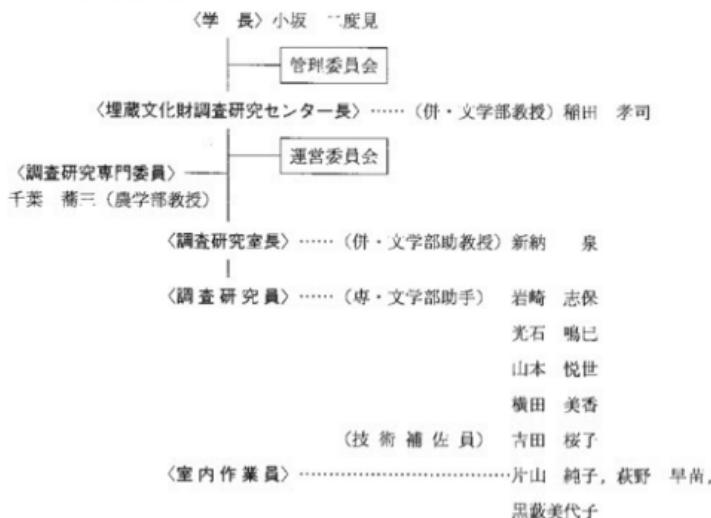
この規程は、平成5年2月25日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価の実施に関する必要な事項を審議するために置く岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会について、必要な事項を定めるため。

1995年度埋蔵文化財調査研究センター組織

1 センター組織一覧



2 管理委員会

委員

学長	小坂二度見	文化科学研究所長	神立 春樹
文学部長	工藤進思郎	自然科学研究所長	中村怜之輔
教育学部長	木原 孝博	資源生物科学研究所長	青山 熊
法学部長	早瀬 武	附属図書館長	岡部 喬
経済学部長	藤本 利躬	医学部附属病院長	折田 薫三
理学部長	岩見 基弘	歯学部附属病院長	村山 洋二
医学部長	松尾 信彦	固体地球研究センター長	久城 育夫
歯学部長	中井 宏之	医療技術短期大学部長	遠藤 浩
薬学部長	篠田 純男	学生部長	伊澤 秀而
工学部長	中島 利勝	事務局長	伊藤 公欽 (～9/30)
農学部長	千葉 荘三		新井 雄隆 (10/1～)

環境理工学部長 河野伊一郎 埋蔵文化財調査研究センター長 稲田 孝司
幹事
庶務部長 新屋 秀幸 経理部長 池本 洋一
施設部長 井内 敏雄

審議事項

- 1995年5月24日 平成6年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
平成7年度埋蔵文化財調査研究センター予算について
平成7年度事業計画について
- 1996年1月24日 助手及び技術補佐員の採用について
平成7年度施設整備に伴う埋蔵文化財発掘調査計画について
平成7年度当初配分予算の返金及び工学部整理費の追加について
福利施設（南）の発掘調査の経過について
運営委員の継続及び任命について

3 運営委員会

委員

- センター長 稲田 孝司 医学部教授 村上 宅郎
文学部教授 犬野 久 農学部教授 千葉 喬三（調査研究専門委員）
教育学部教授 高重 進 事務局 井内 敏雄（施設部長）
経済学部教授 建部 和広 埋蔵文化財調査研究センター 新納 泉（調査研究室長）

審議事項

- 1995年5月18日 平成6年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
平成7年度埋蔵文化財調査研究センター予算案について
平成7年度埋蔵文化財調査研究センターの事業計画について
- 1995年9月21日 福利施設（北）の発掘調査成果について
福利施設（南）の発掘調査開始について
- 1995年12月19日 助手及び技術補佐員の採用について
平成7年度施設整備に伴う埋蔵文化財発掘調査計画について
平成7年度当初配分予算の返金及び工学部整理費の追加について
福利施設（南）の発掘調査の経過について
運営委員の継続及び任命について

附編

津島岡大遺跡第6次調査出土種子の分析

岡山大学環境理工学部助教授 沖 陽子

津島岡大遺跡第6次調査^①で出土した種子の分析結果を以下に一覧表の形で掲載する。

出土種子一覧表

遺構番号	科:種名(属名)	□:多量に出土
SP 01	イネ科:メヒシバ、アキメヒシバ、アキノエノコログサ、スズメノヒエ、ムクオレグサ、ヒエ属:カヤツリグサ科:ホタルイ、イスホタルイ、スゲ属、カヤツリグサ科 タデ科:イヌタデ、タデ属:ヒユ科:イヌビュ、シソ科:ヒメジソ、マメ科:インゲンマメ属、キク科:タカサゴロウ	
クワ科:カジノキ、クワ(ヤマグワ?)、カナムグラ、コウ?、バラ科:フニイチゴ、スイカズラ科:ニワトコ、アカネ科:ヤエムグラ、ブドウ科:ノブドウ、ヤブガラシ、ツバキ科:サカキ、トウダイグサ科:アカメガシワ、ウリ科:ヒョウタン、ヤマボウキ科:マルミノヤマボウ		
セリ科:セリ、カシ類:クスノキ科:クスノキ、ドングリ類		
SP 02	イネ科:メヒシバ、アキメヒシバ、オヒシバ、アキノエノコログサ、キンエノコロ、エノコログサ、スズメノヒエ、カズノングサ、カヤツリグサ科:ホタルイ、ゴウソ、スゲ属、カサズグ、アオヌグ、アゼナルコスグ、カヤツリグサ科 タデ科:タデ属、シロバナサクラタデ、サナエタデ、スカボタデ、シソ科:キランソウ、ホトケノザ、ヒユ科:イヌビュ、アカザ科:シロザ(アカザ?)、アリタソウ(ケアリタソウ)、キク科:タカサゴロウ、ヒシアザミ、クワ科:カジノキ、カナムグラ、コウ?、クワ(ヤマグワ?)、バラ科:ヤイチゴ属、フユイチゴ、スイカズラ科:ニワトコ、アカネ科:ヤエムグラ、ヤエムグラ属、ブドウ科:エビヅル、ツバキ科:サカキ、ミカン科:カラサンシウ、ウリ科:ナツメ、ヤブジラミ、ナス科:イスホウズキ、ハダカホウズキ、ナス科:ムラサキ科:ハナバナ科、ドングリ類	
SP 03	イネ科:メヒシバ、キンエノコロ、エノコログサ、スズメノヒエ、カヤツリグサ科:ホタルイ、ホタルイ属、イスホタルイ、カングainen タデ科:イヌタデ、ボントクタデ、スパイキングウゲ科:キンボウゲ属:シソ科:キランソウ、ヒメジソ、アカザ科:シロザ(アカザ?)、アリタソウ(ケアリタソウ)、キク科:タカサゴロウ、クワ科:カジノキ、クワ(ヤマグワ?)、バラ科:ヤイチゴ属、スイカズラ科:ニワトコ、ブドウ科:エビヅル、ノブドウ、ナス科:イスホウズキ、ウコギ科:タラノキ、ブナ科:カシ類幼果、ドングリ類	
SP 04	イネ科:メヒシバ、アキメヒシバ、キンエノコロ、エノコログサ、コツブキンエノコロ、ナルコビュ、スズメノヒエ、カヤツリグサ科:ホタルイ、ホタルイ属、カヤツリグサ科 タデ科:イヌタデ、シロバナサクラタデ、ヒユ科:ヒナヒノコヅチ、アカザ科:シロザ(アカザ?)、キク科:タカサゴロウ、クワ科:カジノキ、クワ(ヤマグワ?)、バラ科:ヤイチゴ属、スイカズラ科:ニワトコ、ブドウ科:エビヅル、ノブドウ、ナス科:イスホウズキ、ウコギ科:タラノキ、ブナ科:カシ類幼果、ドングリ類	
SP 05	イネ科:メヒシバ、アキメヒシバ、キンエノコロ、エノコログサ、コツブキンエノコロ、スズメノヒエ、カヤツリグサ科:イヌタデ、サンカクイ?、オニガヤソツ?、スゲ属 タデ科:イヌタデ、ヒユ科:イヌビュ、クワ科:カジノキ、バラ科:モモ、ブドウ科:エビヅル、ケシ科:ケシ、センダン科:センダン、クスノキ科:クスノキ、ドングリ類	
SP 06	イネ科:メヒシバ、アキメヒシバ、アキノエノコログサ、キンエノコロ、エノコログサ、カヤツリグサ科:カヤツリグサ科 タデ科:イヌタデ、シソ科:キランソウ、クワ科:カジノキ、クワ(ヤマグワ?)、スイカズラ科:ニワトコ、アカネ科:ヤエムグラ、ウコギ科:タラノキ	
SP 07	イネ科:メヒシバ、アキメヒシバ、キンエノコロ、スズメノヒエ、カヤツリグサ科:ホタルイ、イスホタルイ、サンカクイ?、スゲ属 シソ科:キランソウ、ミゾコウジ?、キク科:タカサゴロウ、クワ科:カジノキ、カナムグラ、バラ科:フユイチゴ、ナワシヨイチゴ、ナデシコ科:ハコベ属、スイカズラ科:ニワトコ、ブドウ科:エビヅル、ツバキ科:サカキ、マタタビ科:マタタビ、ヤマノイモ科:ヤマノイモ、イモ属 ブナ科:アラカシ幼果、アラカシ トウダイグサ科:ニヨキガサ、アカメガシワ、ナス科:ナス科 ヒノキ科:ヒノキ	
SP 08	イネ科:メヒシバ、アキメヒシバ、キンエノコロ、エノコログサ、コツブキンエノコロ、スズメノヒエ、ススキ、カヤツリグサ科:ホタルイ、ホタルイ属、イスホタルイ、サンカクイ、タログワ?、イスホタルイ?、スゲ属、カヤツリグサ科 タデ科:イヌタデ、タデ属、シロバナサクラタデ?、ヤナギタデ?、スイバ、イシミカシモ科:シソ科:キランソウ、ヒメジソ、アカザ科:シロザ(アカザ?)、キク科:カシサンイタンボボ、クワ科:カジノキ、クワ(ヤマグワ?)、ナツムダリ、イスビワ、バラ科:ヤイチゴ属、アカネ科:ヤエムグラ、ヤエムグラ属、ブドウ科:エビヅル、ヒビヅル、ツバキ科:サカキ、マタタビ科:マタタビ、ヤマノイモ科:ヤマノイモ、ナス科:ナス科 ヒノキ科:ヒノキ球果、ヒノキ トペラ科:トペラ、モチノキ科:モチノキ属、ウコギ科:タラノキ、ドングリ類	
SP 09	イネ科:メヒシバ、アキメヒシバ、オヒシバ、アキノエノコログサ、キンエノコロ、エノコログサ、コツブキンエノコロ、スズメノヒエ、ヨシ カヤツリグサ科:ホタルイ、カヤツリグサ科 タデ科:イヌタデ、カヤツリグサ科 タデ科:イヌタデ、シロバナサクラタデ?、ヤナギタデ?、スイバ、イシミカシモ科:シソ科:キランソウ、ヒメジソ、アカザ科:シロザ(アカザ?)、キク科:カシサンイタンボボ、クワ科:カジノキ、クワ(ヤマグワ?)、ナツムダリ、イスビワ、バラ科:ヤイチゴ属、アカネ科:ヤエムグラ、ヤエムグラ属、ブドウ科:エビヅル、ヒビヅル、ツバキ科:サカキ、カシ類幼果 クスノキ科:クスノキ、ヒノキ科:ヒノキ球果、ヒノキ トペラ科:トペラ、モチノキ科:モチノキ属、ウコギ科:タラノキ、ブナ科:カシ類幼果 クスノキ科:クスノキ、ニレ科:ムクノキ、ドングリ類	
SP 10	イネ科:メヒシバ、アキメヒシバ、オヒシバ、アキノエノコログサ、キンエノコロ、エノコログサ、カヤツリグサ科:ホタルイ、ホタルイ属、イスホタルイ、スゲ属、ウキヤガラ?, カヤツリグサ科 タデ科:イヌタデ、ボントクタデ、シロバナサクラタデ?、シロバナサクラタデ?、ヤナギタデ?、スイバ、ヒユ科:イヌビュ、アカザ科:シロザ(アカザ?)、カワラアカザ、マメ科:ミヤコグサ?、ツツジ科:ナツハゼ?、クワ科:ヤマグワ(クワ?), カナムグラ、カジノキ、バラ科:フユイチゴ、ナワシヨイチゴ、スミレ属、スイカズラ科:ニワトコ、アカネ科:ヤエムグラ、ブドウ科:エビヅル、ツバキ科:サカキ、ミカン科:イスザンショウ、カラザンショウ、トウダイグサ科:アカメガシワ、ブナ科:アラカシ幼果	

SP 1	イネ科: メヒシバ、アキメヒシバ、アキエノコログサ、キンエノコロ、エノコログサ、コフキンエノコログサ、イスビニ、ヒニ属、 <u>スズメノヒニ</u> カヤツリグサ科: <u>ホタルイ</u> 属、イスホタルイ、 <u>タデ</u> 属、マツバイ、サンカクイ?, カヤツリグサ科 タデ科: <u>タデ</u> 属、イヌタデ、シロヂ(アカザ?)、マメ科: モンキウマゴヤシ果実 クワ科: カナムグラ、カジノキ、ヒノキ、バラ科: フユイチゴ、ナワシロイチゴ、スイカズラ科: ニワトコ、アカネ科: ヤエムグラ属、ブドウ科: エビヅル、ツバキ科: サカキ、ミカン科: カラスザンショウ、ウリ科: ヒョウタン、ヤマゴボウ科: マルミヤマゴボウ、ヤマゴボウ? ブナ科: イナガハ効果、ナス科: イヌホウズキ、ヒルムシロ科: ヒルムシロ、ヒルムシロ属、カバノキ科: イヌシマ、マタタビ科: <u>マタタビ</u> トベラ科: <u>トベラ</u> <u>ドングリ類</u>
SP 1 3	イネ科: メヒシバ、アキメヒシバ、オヒシバ、アキエノコログサ、キンエノコロ、エノコログサ、コログサ、コブシノエコロ、スズメノヒニ、ミン カヤツリグサ科: <u>ホタルイ</u> 、スグ属、カヤツリグサ科 タデ科: <u>タデ</u> 属、ヤナギタデ、シロバナサクタデ、ヤナエタデ、シソ科: キラソウ ヒユ科: イヌビニ、アカザ科: シロヂ(アカザ?)、キク科: タカサゴロウ? クワ科: <u>カナムグラ</u> 、タリ(ヤマダリ)?、 <u>ヨウノ</u> バラ科: フユイチゴ、ナワシロイチゴ、ヒニチゴ属、スイカズラ科: ニワトコ、アカネ科: <u>ヒニスグラ</u> 、ヤエムグラ属、ブドウ科: エビヅル、ノブドウ、ツタ、ツバキ科: サカキ、ミカン科: カラスザンショウ、ウトダイグサ科: アカメガシワ、カタバミ科: カタバミ、ウリ科: ヒョウタン(シナリ類) ブナ科: <u>アラカシ</u> カシ類効果、ドングリ類
SP 0 1	イネ科: メヒシバ、アキメヒシバ、オヒシバ、アキエノコログサ、キンエノコロ、エノコログサ、コログサ、コブシノエコロ、スズメノヒニ、ミン カヤツリグサ科: <u>ホタルイ</u> タデ科: <u>タデ</u> 属、ヘルタデ、ソバ属、ギンギギ、タデ科 キンボウゲ科: キンボウゲ属、ヒユ科: イヌビニ、シソ科: ヒメジソ、ヤランソウ、マメ科: <u>イグンザンノ</u> キク科: タカサゴロウ、オナモミ クワ科: カナムグラ、バラ科: フユイチゴ、キイチゴ属、サクラ属、サクラ属属、スキモモ属、ヤマキモ、モモ ナデシコ科: ミドリハコベ、ブドウ科: ノブドウ、エビヅル、ナス科: ナス科、ミカン科: カラスザンショウ、ウトダイグサ科: アカメガシワ、カタバミ科: カタバミ、ウリ科: <u>ヒニスグラ</u> 、ヒルムシロ科: クマツラ科: クサギ、マツグサ科: ビナンカズラ、ドングリ類
SP 0 2	SP 0 1 と同様にカジノキが多いが、イネ科、カヤツリグサ科、タデ科、ナス科の種類も多い。シソ科のホトケノザ、アカザ科のアリタソウ、セリ科のヤブジラミ、ムラサキ科のハナイバナが日新し種である。
SP 0 3	比較的の出土種子は少ないが、タデ科のスイバ、キク科のカンサイタンボボ、ナデンコ科のツメクサ、アブラナ類などが目をひく。
SP 0 4	水田や湿地に多いホタルイが多量に出土しており、また、湿地に多いシロバナサクタデも認められた。
SP 0 5	イヌタデが多く出土し、他にイネ科やカヤツリグサ科の種類が多く認められた。特に食用となるカヤツリグサ科の種類が多く認められた。また、モモも確認されている。
SP 0 6	最も出土種子が少ない貯蔵穴である。
SP 0 7	SP 0 5・0 6と同様に出土種子は少ないが、タデ科、フユイチゴ、ニワトコ、マタタビなど食利用が可能な種が認められる。
SP 0 8	イネ科、カヤツリグサ科、タデ科が中心で、特にイネ科では、メヒシバ、キンエノコロ、スズメノヒニが、カヤツリグサ科ではサンカクイが、タデ科ではイヌタデが多く出土している。
SP 0 9	イネ科のメヒシバ、タデ科のイヌタデが多量に出土している。また、クリ科やブドウ科など食利用可能な種も多い。
SP 1 0	カヤツリグサ科のホタルイ及びタデ属が多量に出土している。他にマメ科のミヤコグサやミレ科が目新し。
SP 1 1	イネ科のスズメノヒニ、カヤツリグサ科のホタルイ、スグ属及びタデ属が多く出土している。カヤツリグサ科、タデ科、オトギリソウ科に湿地や水田を好む種が多く認められる。
SP 1 2	タデ科のカナムグラ、カジノキ、コウソウ及びアカネ科のヤエムグラの種子が多数出土した。また、ブドウ科、ヤマゴボウ科、アカザ科、ヒユ科、キイチゴ属、ヒョウタン、ニワトコ、マタタビなど食利用が可能な種が多い。水生植物のヒルムシロの出土が興味深い。
SP 1 3	多量のアラカシとカナムグラが出土している。イネ科やタデ科の種類が多い。また、SP 1 2と同様に食利用が可能な種が多く認められた。

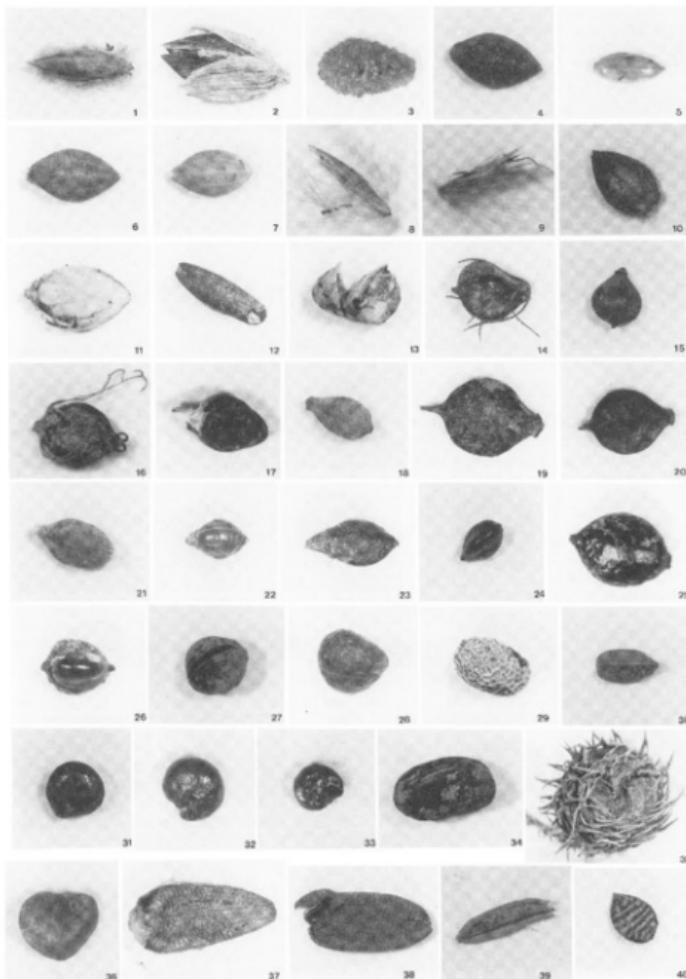


写真16 津島岡大遺跡第6次調査出土種子(1)

1. メシバ($\times 5$)
2. アキメヒシバ($\times 10$)
3. オヒシバ($\times 11$)
4. アキノエヌコログサ($\times 6$)
5. エノコログサ($\times 6$)
6. キンエノコロ($\times 6$)
7. コツブキンエノコロ($\times 8$)
8. ョシ($\times 4$)
9. ススキ($\times 4$)
10. スズメノヒエ($\times 5$)
11. ナルコビユ($\times 5$)
12. ムツオレグサ($\times 4$)
13. カズノコグサ($\times 6$)
14. ホタルイ($\times 15$)
15. イヌホタルイ($\times 6$)
16. サンカクイ($\times 7$)
17. イヌクログワイ($\times 6$)
18. マツバイ($\times 11$)
19. スグ麗($\times 10$)
20. アザナルコスゲ($\times 8$)
21. アオスゲ($\times 9$)
22. ホソバウナギフカミ($\times 6$)
23. シロバナサクラタデ($\times 6$)
24. ヌカボタデ($\times 6$)
25. サナエタデ($\times 8$)
26. イヌタデ($\times 8$)
27. イシカワ($\times 4$)
28. ヒメジソ($\times 6$)
29. キランソウ($\times 8$)
30. ホトケノザ($\times 5$)
31. シロザ(アカザ?)($\times 9$)
32. カワラアカザ($\times 13$)
33. アリタソウ($\times 10$)
34. イングンマメ属($\times 3$)
35. モンツキウマゴヤシ果実($\times 3$)
36. エヤコグサ?($\times 8$)
37. ヒレアゲミ($\times 8$)
38. タカサプロウ($\times 7$)
39. カンサイタンボボ($\times 6$)
40. カタバミ($\times 7$)

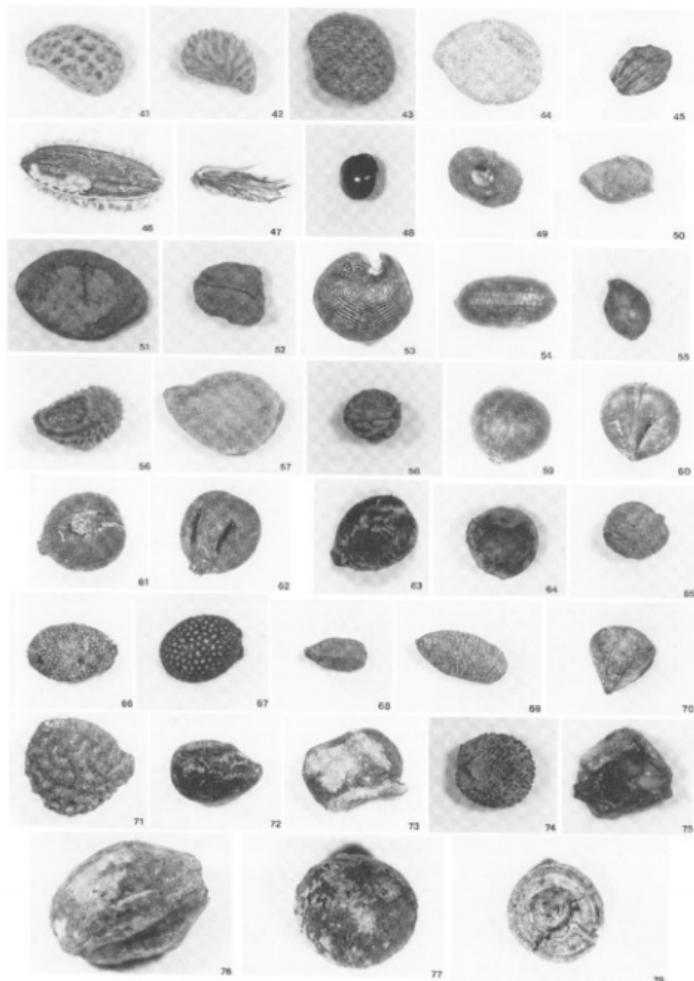


写真17 津島岡大遺跡第6次調査出土種子(2)

41. ナツヨイチゴ($\times 7$) 42. フユイチゴ($\times 7$) 43. ハダカホウズキ($\times 8$) 44. イヌホウズキ($\times 9$) 45. セリ($\times 4$) 46. ヤブジラミ($\times 7$) 47. ヒナタイノゴヅチ($\times 4$) 48. イヌビユ($\times 8$) 49. ヤエムグラ($\times 8$) 50. ヒルムシロ($\times 5$) 51. スズメウリ($\times 4$) 52. ニユクサ($\times 4$) 53. マルミノヤマゴボウ($\times 6$) 54. ミズオトギリ($\times 16$) 55. スミレ属($\times 7$) 56. ハナイバナ($\times 9$) 57. キンボウゲ属($\times 8$) 58. ケシ($\times 9$) 59. ノゾドリ($\times 3$) 60. ノブドウ($\times 3$) 61. エビヅル($\times 5$) 62. エビヅル($\times 5$) 63. フタ($\times 4$) 64. カナムグラ($\times 4$) 65. カジノキ($\times 5$) 66. マタタビ($\times 7$) 67. サルナシ($\times 9$) 68. タラノキ($\times 6$) 69. ニワトコ($\times 5$) 70. イヌシデ($\times 4$) 71. カラスズキンショウ($\times 5$) 72. サカキ($\times 5$) 73. トベラ($\times 6$) 74. アカメガシワ($\times 3$) 75. ヒノキ($\times 3$) 76. センダン($\times 3$) 77. タスノキ($\times 3$) 78. イタイガシ幼果($\times 3$)

1996年10月20日 印刷
1996年10月22日 発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報13 1995年度

編集 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中3丁目1番1号
(086)251-7290

印刷 西日本法規出版株式会社
岡山市高柳西町1-23
(086)255-2181(代)